『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (14)
―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1287 ～ 1292 年）

中沢敦夫，宮野裕，今村栄一

富山大学人文学部紀要第 74 号抜刷
２０２１年２月

『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (14) ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1287 ～ 1292 年）

中沢敦夫，宮野裕，今村栄一

【ウラジーミル公がムスチスラフ公に宛てた遺言状（約定書）：1288 年 2 月前半】

ウラジーミル公 [I1121] の手書き文書 [1)]。

「父と子と聖霊の名において，聖なる聖母にして永遠の処女マリアおよび聖なる天使たちの祈りによって。ヴァシリコ [I112] の息子にしてロマン [I11] の孫である，わたし，ウラジーミル公 [I1121] は，自分のすべての土地と城市を，自分の死後に，自分の兄弟ムスチスラフ [S4] に与える。公座を置く自分の城市ヴラジミルも〔与える〕[2)]。

わたしは，他の同様の文書も自分の兄弟〔レフ [S2]〕に対して書いた [3)]。わたしは自分の公妃〔オリガ〕に対しても同様の文書を書くつもりである [4)]」。

【ウラジーミル公が公妃に宛てた遺言状：1288 年 2 月前半】

「父と子と聖霊の名において，聖なる聖母にして永遠の処女マリアおよび聖なる天使たちの祈りによって。ヴァシリコ [I112] の息子にしてロマン [I11] の孫である，わたし，ウラジーミル公 [I1121] は〔この〕文書を書く。

1）この表題はフレーブニコフ系写本にはなく，イパーチイ写本が成立した 14 世紀中頃に付されたものである。以下の二つの文書のうち最初のものは，内容から見ると，ムスチスラフ [S4] との約定書と遺言状も兼ねており興味深い。文脈から見て，これは明らかに，実際に作成された文書を筆写して，本年代記に書き込んだものである [Котляр 2005: C.351]。

なお, ここで「手書き文書」と訳した рукописание は, 文字通りでは「手で書いたもの」を意味している。この рукописание の語が遺言状も意味する用例としては，中世文献においては，この個所が初出である。それ以降, この語はノヴゴロドに伝わって, もっぱら「遺言状」の意味で広く用いられるようになった。これに対して，14 世紀以降のモスクワ国家では，遺言状をあらわす用語は，душевная, духовная, духовная грамота が用いられるようになった。[Накадзава 2003: C. 75-78] 参照。

2）この文書については，[Купчинський 2004: C. 312-313] を参考。

3）「他の同様の文書も自分の兄弟に対して書いた」(Другую же грамоту писахъ брату своему такую же) の「兄弟」とは，文脈から判断して，ウラジーミル死後の所領を，ムスチスラフ [S4] と争っていたレフ [S2]（[イパーチイ年代記 (13)：注 303] 参照）のことを指すと解釈すべきだろう。利害関係者として，文書（遺言状）を書いて送ることは当然考えられる。

4）この「自分の公妃にも同様の文書を書くつもり」(хочю и еще и княгинѣ своей псати грамоту такую же) は，明らかにすぐ後に続く公妃宛ての「遺言状」のことを指している。

わたしは，自分の死後に，自分の城市コブルィン[5] (Кобрынь) を，その民と貢税とともに[6] 自分の公妃に与える。生前にわたしに納められたものは，わたしの死後にはわが公妃に納めるように。わたしはまた，かの女〔公妃〕に自分の村ゴロデル[7] (Городелъ) を，その取引税[8] とともに与える。わたしのために労働してきた[9] 民は，自分の死後にわたしの公妃のために〔労働するように〕。

公が城砦を建設するときには**【*904*】**，かれら〔住民〕は城砦に属し，〔かれらからの〕税の徴収[10] やタタール税[11]〔徴集の権限〕は公に属する。

わたしは，サドヴォエ[12] (Садовое)〔村〕とソミノ[13] (Сомино)〔村〕をかの女に，すなわち自分の公妃に与える。

わたしは，自分の聖使徒修道院[14] を自分の力で創建した。また，わたしは，ユーリエヴィ

---

5)「コブルィン」(Кобрынь) はヴォルィニ地方の城市で，現在のベラルーシ，ブレスト州のコブリン (Кобрин) に相当する。ベレスチエ（ブレスト）から東へ 43km ほど，ヴラジミルからなら北へ 150km ほど離れている。ウラジーミルが建設したカメネツ（[イパーチイ年代記 (13)：注 297]）のすぐ近くに位置している。

6)「民と貢税とともに」(с людми и з данью)。公はその領地 (волость) の支配民（люди）から貢税 (дань) を徴集することがもっとも基本的な収入だった。そのため領地を譲与することは，貢税収入をあわせて譲与することでもあることを，ここで明記したもの。

7)「ゴロデル」(*Ип.*: Городелъ; *Хлб.*: Городло) は，ポーランドのルブリン県フルビェシュフ郡のウクライナ国境近くのホロドウォ (Horodło) 村として現在も名称を保持している。ヴラジミルからだと西北西方向に 20km ほどしか離れていない。取引税（次注）徴集の場所だったということは，ポーランドとの交易が盛んな結節点にあたっていたのだろう。

8)「取引税」(мыт) は，貢税（上注 6）以外に徴集する様々な手数料のことで，商品や物資の輸送，通行（渡河や街道の利用），商品の取引などに対してその当事者から徴集するもの。そのために支配公は，交通の要所に取引税徴集人 (мытники, мытчики) を配置していた。

9)「わたしのために労働してきた」の原文は на мя страдалѣ だが，フレーブニコフ系写本は на мя тягли（税負担をしてきた）となっている。どちらが本来の読みに近いかは判断が難しい。

10)「税徴収」(побор) は民に課した貢税（上注 6 参照）を徴集することを指している。

11)「タタール税」(тотарьщина) は，貢税の中でも宗主であるタタール人に支払う分として公が徴集している税金を指している。北東ロシアで用いられたタタール人に支払う税を指す語 выход に相当する [Пашуто 1950: С. 141]。

12)「サドヴォエ」(Садовое) は，普通名詞として「庭」を指すことから同定が難しいが，次注の「ソミノ」に隣接した場所と考えてよいだろう。

13)「ソミノ」(Сомино) は，現在のウクライナ，ヴォルィニ州のソミネ湖 (Сомине) 周辺を指すと考えられる。ヴラジミルからだと北へ 38km ほどしか離れていない。

14)「自分の聖使徒修道院」(манастырь свой Апостолы) については，19 世紀に編まれた「ヴラジミル市史」によれば，ヴラジミルの市域の西辺，ルガ川 (Луга) 右岸の丘の上にあり，18 世紀～ 19 世紀初めまで存在していた記録が残されていた。その後焼失して [Теодорович 1893: С. 155-157]，現在遺構等は残っていない（[Антипов 2000: С. 152][Терський 2010: С. 204] も参照）。

チ[15] (у Юрьевича)，およびフェドロク・ダヴィドヴィチから[16] (у Давыдовича Фодорка)，ベレゾヴィチ[17] (Березовичѣ)〔村〕を購入し，その対価として，50 クナ・グリヴナ[18]，赤地高級羅紗[19] 5 ロコチ[20]，薄片鎧[21] を支払った。そして，これ〔ベレゾヴィチ村〕を聖使徒〔修道院〕に与えた。

わが公妃〔オリガ〕はわたしの死後に，修道女になることを望むのなら，そのようにさせよ[22]。それを望まないのなら，かの女の好きなようにさせよ。わたしは，自分の死後には誰が何を行うかについて，甦って見るわけにはいかない」。

【ムスチスラフはウラジーミル公に，公妃オリガと娘イジャスラヴァの庇護を約束し，十字架接吻で誓う：1288 年 2 月 15 日】

その後，ウラジーミル [I1121] は，ムスチスラフ [S4] のもとに使者を遣って，こう言った。「わが兄弟のムスチスラフ [S4] よ。次の点についてわしに十字架接吻して〔誓え〕。わしの死後に，そなたは，わしの公妃〔オリガ〕から，わしがかの女に与えた物は何も奪い取らないことを。

15）「ユーリエヴィチ」（Юрьевич) の人物像については不明だが，父称の使用などから判断して，代々ヴラジミルの郊外地を所有していた貴族（豪族）だったのだろう。

16）「フェドロク・ダヴィドヴィチ」(*Ип*. Давыдович Фодорк; *Хлб*. Входорок) については，ポーランド語訳注によれば，貴族のリエフ（ダヴィド）・ダヴィドヴィチの息子と推定しているが根拠は不明。いずれにせよ，当時の貴族による土地所有と売買を示す史料としては貴重である [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 247, przyp.1679]。

17）「ベレゾヴィチ」(Березовичѣ) 村は，現在のウクライナ，ヴラジミル＝ヴォルィンスキイ州のベレゾヴィチ (Березовичі) 村として名称が保持されている。ヴラジミルの中心から東南東方向へ 19km ほど離れており，城市にあった修道院の扶養のための村としては好適な場所である。

18）「50 クナ・グリヴナ」(50 гривенъ кунъ) の「グリヴナ」(гривна) は当時の貨幣単位。銀の重さ換算で金銭単位として用いられ，おそらく 1 グリヴナは約 200 グラムの重さに相当したと考えられる。50 グリヴナならば，銀 10kg 相当の価値の金額ということになる。ただし，「クナ・グリヴナ」(гривна кун) になると，銀での支払いではなく，「クナ」(куна)，すなわち，銀と並行して流通していた毛皮（様々な毛皮獣の）による支払いが前提となった呼称で，実際には銀で支払うよりも安価だったと考えられている。

19）「赤地高級羅紗」(скорлат) は，フランス語 écarlate（深紅の布）からの借用語で，フランス製の赤地の高級な羅紗布を指している。高価なもので，高額の支払い手段として流通していたのだろう。

20）「ロコチ」(локоть) は長さの単位でいわゆる「肘尺」の意味で，およそ 40cm くらいだから，5 ロコチは 2m 前後になる。

21）「薄片鎧」(бронѣ дощатые) は，皮や金属の小片をつなぎ合わせて作った鎧（よろい）で，いわゆるラメラ・アーマーのこと。中世ヨーロッパでは普通の武具の一つだった。「羅紗」（上注 19）と同じく，高額の支払い手段として流通していたのだろう。

22）公妃オリガは実際に夫ウラジーミル公の死後に受戒して修道女となり，エレーナという修道名を得ているという [Котляр 2005: С. 358]。

そして，かの子供であるイジャスラヴァ[23]からも〔何も奪わないことを〕。かの女〔イジャスラヴァ〕を無理矢理に誰かに嫁がせないことを。だが，わが公妃が気に入った相手であれば，そこに嫁がせることを」。

ムスチスラフ [S4] は〔使者に〕言った。〔ウラジーミルにこう〕言え。「主人よ，兄弟よ。あなたの死後に，わたしがあなたの妃とあの子供〔イジャスラヴァ〕から，何かを奪い取るなど神にかけてありません。わたしは自分の義理の姉〔公妃オリガ〕を，**【*905*】**自分にとっての大切な母親のように敬うことを，神に〔誓います〕。あなたが語っている，あの子供〔イジャスラヴァ〕については，どうか神がかの女をお導き下さるように。わたしは，神の御心によって，わたしの血を分けた娘として嫁がせましょう」。

これについて，〔ムスチスラフは〕十字架接吻して〔誓った〕。これが行われたのはテオドロスの日曜日[24]だった。

【ムスチスラフはヴラジミルへ行き，直ちに公支配を望むが，断られてルチェスクへ戻る：1288 年 2 月後半】

〔ムスチスラフ [S4] は〕兄弟〔ウラジーミル〕と約定を結ぶと，〔ライから〕ヴラジミルへ向けて出発した[25]。かれはヴラジミルに到着すると，主教座のある聖なる聖母〔教会〕へ向かい，ヴラジミル在住の自分の兄弟〔ウラジーミル〕の貴族たち，ルーシ人の市民とドイツ人たち[26]を呼び集めた。そして，全員の前で兄弟〔ウラジーミル〕の，土地とすべての城市，および公座を置く城市ヴラジミルが〔自分に〕与えられることについての文書を読み上げるよう命じた。老若貴賤を問わず皆がこれを聴いた。

23）ウラジーミルの養女イジャスラヴァ (Изяслава) については，[イパーチイ年代記 (13)：注 308] を参照。

24）「テオドロスの日曜日」(Феодорова неделя) は，殉教聖人ティロンのテオドロスの祝祭日で，大斎の始まりの第 1 週の日曜日に当たる。1288 年の場合は，2 月 15 日に相当する。十字架接吻のような儀式は聖職者立ち会いのもとで祝祭日（日曜日）に行われるのが普通だった。なお，неделя を「週」と解すれば（その可能性は低いが）2 月 9 日～ 15 日に相当する（ポーランド語訳注は 2 月 15 日～ 21 日としているがこれは誤認で，「週」の場合は祝祭日から数えて前の 7 日間に相当する）。

25）これ以後の事態の進展から見ると，ムスチスラフは主教エフシグニイに同行して，ライからヴラジミルへ向かっている。

26）「ルーシ人の市民とドイツ人たち」(мѣстичѣ русци и нѣмцѣ *Ип*. ; мѣстичи рус и нѣмци – *Хлеб*.) は「ルーシ人の市民」(мѣстичѣ русции が原初形と想定される) と「ドイツ人」と分けて読むことができる。「市民」(мѣстичи) は，西ルーシ的な語彙で「都市（の住民）」(горожаны に対応) を意味している（住民の中の上流層を指す可能性はある）。この場合はヴラジミルの住民のこと。「ドイツ人たち」はヴラジミルに居住を許されていた特権商人たちを指している。なお，諸注にみられるような，この語をドイツ都市法の影響の下にある住民と解釈することは根拠が乏しいようである [Лукин 2010: С. 170-171]。

ヴラジミル主教エフシグニイ[27] (Евьсѣгнѣй) は，ムスチスラフ [S4] に対して，挙栄用の十字架[28]によって, かれのヴラジミルにおける公支配を祝福した。〔ムスチスラフは〕ヴラジミルで，公としてすでに支配しようとしていたからである。しかし，兄弟〔ウラジーミル [I1121]〕は，かれにそのことを許さず，こう〔使者を通じて〕言った。「わしの死後に公支配できるではないか」。

ムスチスラフ [S4] は，ヴラジミルに数日間滞在したが，自分の城市であるルチェスク[29] (Луческъ) へ〔それから〕ドゥーベン[30] (Дубенъ), そしてその他の諸城市（〔具体的に〕わたしは書かないが）へと行った。

【ウラジーミル公はリュボムリへ行き，そこで冬越しする：1288 年 2 月～ 4 月頃】

ウラジーミル [I1121] はライ[31](Рай) からリュボムリ[32](Любомль) へとやって来た。その場所で，冬のあいだずっと病身を横たえていた。そのあいだ，自分の従者たちを狩に派遣していた。なぜなら，〔ウラジーミルは〕自分自身が，良い勇敢な狩人[33] であり，猪や熊【***906***】を狩る時に一度たりとも従者〔の加勢〕を待ったことはなく，加勢があっても，自分自身でどのような獣も打ち殺したからである。そのことゆえに，かれは全土で有名だった。なぜならば，神はかれ〔ウラジーミル〕の善行と信義ゆえに，かれに狩猟だけでなく，すべてについて幸運を与えたのだから。

しかし，われらは前の記述に戻ろう。

夏がやって来た[34]。ウラジーミル [I1121] の兄弟である，シェモヴィトの息子コンラー

27）ヴラジミル主教「エフシグニイ」(Евьсѣгнѣй) については，[イパーチイ年代記 (13)：注 295] を参照。

28）「挙栄用の十字架」(крест воздвизалный) は，十字架挙栄の祝祭日に聖堂内で儀式（祝福）を行うときに用いる装飾された高価な十字架のこと。

29）ルチェスクは当時のムスチスラフの公支配の拠点都市だった。［イパーチイ年代記 (13)：注 71, 300］参照。

30）ヴォルィニ地方の城市で，現在のドゥブノ (Дубно) に相当する。ヴラジミルからだと東南方向に 113km ほど離れている。

31）ライ (Рай) については［イパーチイ年代記 (13)：注 306］を参照。

32）リュボムリ (Любомль) については［イパーチイ年代記 (13)：注 291］を参照。

33）ウラジーミルが「良い勇敢な狩人」(ловечь добр, хороборъ) であることは，かれの死亡記事の中でも語られている（下注 134 参照）。

34）時系列から見て，1288 年夏に相当する。

ト[35] (Конъдрать князь Сомовитовичь) は,〔ウラジーミルがムスチスラフに〕自分の全ての地の諸城市を与えたことを聞いた。〔コンラートは〕ウラジーミルのもとへ自分の使者を遣って，こう言った。「主人よ，わが兄弟よ[36]，あなたはわたしにとって父にあたっていました。あなたは，ご自身の腕の下で[37]，ご自身の慈悲によって，わたしを支配してきました。主人よ，わたしはあなたによって，公として統治し，自分の諸城市を支配し，自分の兄弟たちから独立して，〔兄弟たちを〕脅かしてきました[38]。主人よ，今，わたしは聞きました。あなたは自分のすべての地と諸城市を，自分の兄弟ムスチスラフ [S4] に与えたことを。わたしは神とあなたに望みを託しています。わが主人よ，どうか，あなたは，自分の使者を，わたしの使者とともにご自身の兄弟ムスチスラフ [S4] のもとに派遣して下さい。主人よ，それは，あなたの兄弟〔ムスチスラフ〕があなたの慈悲によって，わたしをその腕の下に受け入れ，わたしが屈辱を受けたときには，わたしの味方になってくれるためです。主人よ，わたしが屈辱を受けたとき，あなたがわたしの味方になってくれたように」。

ウラジーミル [I1121] は自分の兄弟ムスチスラフ [S4] のもとに使者を遣って，こう言った。「わが兄弟よ，そなた自身も知っているように，**【*907*】**わしには自分の兄弟コンラートがあり，かれに名誉と贈物を与えてきた。かれが屈辱を受けたときには，自分の場合と同様に，かれの味方になってきた。どうか，わしのために，そなたは〔コンラートを〕親愛をもって自分の腕の下に受け入れ，かれ〔の立場〕が悪くなったときにはかれの味方になってほしい」。

ムスチスラフ [S4] はウラジーミル [I1121] にそのようにすることを約束して，こう言った。「わが兄弟よ，あなたのために喜んで親愛をもって〔コンラートを〕自分の腕の下に受け入れましょう。かれが屈辱を受けたときには，どうか神よ，わたしはかれのために戦場に斃れることも厭

35）コンラート二世については，[イパーチイ年代記 (12)：注 367] 参照。1275 年以降はチェルスク (Czersk) を拠点としたマゾフシェ地方の支配公だった。以下に詳しく叙述される，コンラート二世のウラジーミル哲人公 [I1121] への敬意と，その所領相続と権力継承への深い関与から判断して，コンラートはウラジーミル公（死後にはムスチスラフ公）に対して封建的な臣従関係にあったと解釈することができる [Котляр 2005: C. 353-354]。

36）コンラートがウラジーミルに「わが兄弟よ」(братъ мой) と呼びかけているのは，二人は従兄弟（前者は父系，後者が母系での）であることによっている。[イパーチイ年代記 (13)：注 134] 参照。

37）「自分の腕の下」(подъ своею рукою)〔*Ип*. рукую を訂正〕の表現は以下にも続いて三回あらわれるが，「庇護のもとに置くこと」ひいては，「相手に服属，従属すること」を意味している [СлРЯ XI-XVII. Вып. 20, C. 243]。

38）「自分の兄弟たちから独立して，脅かしてきました」(братьи своей отъялъся есмь и грозенъ былъ) とは，ピャスト王朝諸公（「兄弟たち」）の間でのポーランドの地の内争について言っている。当時，コンラート二世は，1275 年にチェルスクを首都とするマゾフシェ公となって以降，兄弟でプウォツク公のボレスワフ二世と争いを続けていた。さらに，クヤヴィ・ピャスト家出身のレシェク二世黒公の手中にあったポーランドの王位（クラクフ公位）を巡って，激しい争いを繰り返していた。

いません」。

その後, ムスチスラフ [S4] はウラジーミル [I1121] のもとに使者を遣って, かれにこう言った。「わたしはコンラートと会合をしたい。神とあなたに，あなたがわたしに命じたことについて報告をしましょう[39]」。

ウラジーミル [I1121] は〔答えて〕言った。「かれ〔コンラート〕と会合するがよい」。

ムスチスラフ [S4] は，自分の使者をコンラートのもとに遣って，言った。「わしはそなたと会合をしたい。わしのもとに来られよ」。ムスチスラフ [S4] の使者はやって来て，ムスチスラフ [S4] の〔この〕言葉をウラジーミル [I1121] に伝えた。〔ウラジーミルは〕これを喜んだ。

【ムスチスラフはコンラートと会合する：1288 年夏～初秋[40]】

その後，コンラートはムスチスラフ [S4] のところにやって来た。ベレスチエヘ (Берестий) 来て[41]，それからリュボムリ (Любомль) へやって来た。かれの配下の者たちは，ウラジーミル [I1121] に伝えてこう言った。「主人よ，あなたの兄弟である，〔わたし〕，コンラートがやって来ました[42]」。かれ〔ウラジーミル〕はかれ〔コンラート〕に自分のもとに来るよう命じた。コンラートはウラジーミル [I1121] のもとにやって来た。

そこでは,〔ウラジーミルは〕自分の病気のために伏しており, ひどく苦しんでいた。〔コンラートは〕入室すると，かれ〔ウラジーミル〕に拝礼して，かれが病気でかれの美しい身体が衰えているのを見て大いに泣いた。〔コンラートは〕兄弟とともに多くの言葉【*908*】を交わしたが，これについてわれらは先に書いたとおりである[43]。〔コンラートは〕宿舎へと向かった。ウラジーミル [I1121] は，自分の良馬をかれ〔コンラート〕に送り届けた。

〔コンラートは〕食事をとると, 出発して〔リュボムリから〕ヴラジミルへと向かった。そして，

39）ムスチスラフは，ウラジーミルの所領を継承することと同時に，ウラジーミルとコンラート二世の間にあった主従関係も継承することを表明したと考えられる。会合（「臣下」であるコンラートが「宗主」となるムスチスラフのもとに出向く）はそのことを確認するための叙任儀式の役割を果たしているのだろう [Котляр 2005: С. 354]。

40）この年代はフルシェフスキイに拠った [Грушевський-Хронологія: С. 375-376]。ウクライナ語訳は 1287 年 9 月下旬～ 1288 年初めとしている。いずれにせよ, レシェク黒公の死（1288 年 9 月 30 日）（下注 47 参照）より前の出来事である。

41）旅程から推定して，コンラートは拠点地チェルスク (Czersk)（現在のワルシャワから南方へ約 35km）からヴィスワ川を下って西ブーグ川に入り，水行してベレスチエヘ到着したと考えられる。

42）この括弧内の言葉はコンラートの使者がウラジーミルに伝えたものだが，当時の使者の口上の慣習通り，コンラートの立場からの一人称の言い方になっている。使者はコンラートになり代わって語っているのである。

43）この「多くの言葉」とは，ウラジーミル死後のムスチスラフへの所領の譲渡についての詳細を指している。

ヴラジミルからルチェスク (Луцк) へと出発した。

かれ〔コンラート〕がルチェスクに着いたとき，ムスチスラフ [S4] はそこにいなかった。ガイ[44] (Гаи) という名の城市〔ルチェスク〕近くの場所にいたのである。この場所は景色が美しく，様々な建物[45] が建っていた。そこにある教会堂はすばらしく，美しさで輝いていた。公〔ムスチスラフ〕にとってそこに滞在することは気に入っていたのである。

コンラートはルチェスクを出発してガイへ向かった。ムスチスラフ [S4] は, 自分の貴族たち, 配下の者たちとともに出迎え，兄弟ウラジーミル [I1121] の言葉の通り，名誉と親愛とともに自分の腕の下に〔コンラートを〕受け入れて，こう言った。「わしの兄弟〔ウラジーミル〕がそなたを遇し，名誉と贈物を与えたように，どうか神よ，わしも同様にそなたを遇し，名誉と贈物を与え，そなたが屈辱を受けたときには味方になれるように」。

その後, 遊興が始まった。ムスチスラフ [S4] はコンラートに, 驚くべき鞍を着けた美しい馬と, 高価な衣服を送った。他にも多くの贈物をかれに与え，名誉とともに帰らせた。

【レシェク二世黒公死去の報がリュボムリのウラジーミルにもたらされる：1288 年 10 月初め】

コンラートがリュボムリから立ち去った後に，ポーランド人ヤルタク[46] (Ярътакъ) がルブリンから〔リュボムリへ〕急ぎやって来た。ウラジーミル [I1121] に報告がもたらされた。「ヤルタクがやって来ました」。〔ウラジーミルは〕じかに引見することを，かれ〔ヤルタク〕に許さなかった。そして, 自分の公妃〔オリガ〕に「何の目的で来たのか, かれ〔ヤルタク〕に訊ねよ」と言った。公妃は【***909***】かれ〔ヤルタク〕を召し出すための使者を遣った。かれ〔ヤルタク〕はすぐにやって来た。

〔公妃は〕次のようにかれに問いただし始めた。「公〔ウラジーミル〕はそなたに『何の目的で来たのか，語れ』とおっしゃっている」。かれ〔ヤルタク〕は語り始めた。「レシェク公

44）この「ガイ」(Гай) という名の場所の所在地については，ルーツク市の中心から 6km ほど南東の，ストィル川 (Стир) 沿いブクティル川 (Бутир) 川河口にあるピドハイツィ村 (Підгайці) に比定され発掘研究もされてきた [Терський 2006: C. 102] [Котляр 2005: C. 354]。いずれにせよ，記述から見てルチェスク（ルーツク）から遠くない，公の郊外屋敷があった場所である。

45）この「建物」は原文では хоромы という語が用いられており，13 世紀までは非教会的な建物を意味していた。ここでは，ムスチスラフの郊外屋敷の建物を指しているだろう [Колесов 1986: C. 197-198]。

46）「ヤルタク」(*Ип*. Ярътакъ; *Хлб*. Яртак) というルブリン（おそらく城市）から派遣された使者についてはその出自等は不明。以下の経緯から見て，ルブリン城内の都市民の中の親コンラート（マゾフシェ）のグループが，レシェク死没の機会を利用して，急ぎコンラート二世と連絡を取ろうとしたのではないか（[Котляр 2005: C.355] および下注 55 を参照）。

(князь Льстко) が亡くなりました[47]」。ウラジーミルは気の毒に思い，かれ〔レシェク〕を哀悼して泣いた[48]。〔ヤルタクは続けて言った〕「ルブリン人がわたしを派遣したのです。コンラート公がクラクフで公支配することを〔人々は〕望んでいるのです[49]。わたしはできるだけ早くコンラートを見つけたい。どこにいるのでしょうか？」 公妃〔オリガ〕は入室すると，ヤルタクの言葉を〔ウラジーミルに〕告げた。ウラジーミル [I1121] はかれ〔ヤルタク〕に乗る馬を与えるよう命じた。かれ〔ヤルタク〕の馬は疲弊していたからである。〔ヤルタクは〕すぐさま出発した。

【コンラート公はレシェク黒公の死を知り，ルブリンへと向かう：1288 年 10 月】

そして〔ヤルタクは〕かれ〔コンラート〕をヴラジミルで見つけ，コンラートに次のように言い始めた。「レシェク公が死に，ルブリン人がわたしを派遣しました。われらのもとに公として支配するために来て下さい，そしてクラクフまで〔行って下さい〕」。

コンラートは，クラクフにおける公支配について，心で楽しみ，魂で喜んだ[50]。そして，すぐさま出発して，リュボムリにやって来た。兄弟〔ウラジーミル〕と相談して，何かかれ〔ウラジーミル〕が自分に助言してくれないかと願ったのである。ウラジーミル [I1121] はかれ〔コンラート〕に引見を許さなかった。しかし, 自分の公妃〔オリガ〕に言った。「行って, かれ〔コンラート〕と話合うがよい。そして，かれを派遣せよ，ここを立ち去って行かせるために。わしには，かれ〔コンラート〕のためにしてやれることは何もない」。

公妃〔オリガ〕は入室して，コンラートに〔ウラジーミルの〕言葉をこう伝えた。「主人よ，あなたの兄弟〔ウラジーミル〕はこう言っています。『わしのドゥナイ[51] (Дунай) とともに行く

47）「レシェク公」(князь Льстко) は，クラクフ＝サンドミェシュ公及びポーランド大公レシェク二世黒公 (Leszek Czarny) のこと。ポーランド史料によれば，かれは 1288 年 9 月 30 日にクラクフで没している [IPSB: Leszek Czarny]。ルブリンからの使者ヤルタクはその直後に派遣されたのだろう。

48）ウクライナ語，ポーランド語訳注でも指摘されているように，このヴラジミルの哀悼についての一文は文脈からも，時系列から見ても不整合であることから，当初の資料にはなく，ウラジーミルの敬虔さを強調するために，のちの編集段階で外挿されたものだろう [Літопис руський, 1989: С. 441, прим. 23][Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 250, przyp. 1712]。

49）マウォポルスカ公領のサンドミェシュの地に属していたルブリンは，クラクフのポーランド大公の支配下にあった。

50）「心で楽しみ, 魂で喜んだ」(возвеселися сердцемь и возрадовася душею) の句は『詩編』の各所に類似の表現がある。例えば，『詩編』15:9（邦訳 16:9）の「このゆえに，わたしの心は楽しみ，わたしの魂は喜ぶ」(сего ради возвеселися сердце мое, и возрадовася язык мой) を参照。

51）「ドゥナイ」(Дунай) の名は，1283 年の記事でウラジーミル公がコンラート二世の要請に応じて派遣した配下の軍司令官の一人として言及されており（[イパーチイ年代記 (13)：注 179] 参照），ウラジーミル公の側近貴族の一人である。

がよい。それがわしにとって名誉になる』」。

〔コンラートは〕すぐさまルブリンに向けて出発した。

【コンラート公はルブリンの市民によって入城を拒否される：1288 年 10 月】

かれ〔コンラート〕がルブリンに近づくと，ポーランド人は〔ルブリン城市の〕城門を閉めて【*910*】，コンラートを城内に入れなかった。コンラートは，修道士たちのもとの丘[52]の上で布陣していた。そして，住民に向けて使者を遣って，こう言った。「なぜ，そなたたちはわしを招いておいて，今になってわしの目の前で城門を閉じるのか」。住民は言った。「われらはあなたを招いてはいない，あなたを呼び寄せる使者も派遣してはいない[53]。われらの頭領はクラクフである。そこにわれらの軍司令官も大いなる貴族たちもいる。もし，あなたがクラクフで公支配をすることになれば，われわれはあなたの〔配下になる〕つもりである」。

【ユーリイ・リヴォヴィチ軍がルブリン城に迫り，城下を掠奪して帰還する：1288 年 10 月～ 11 月】

その後, コンラートに報告がもたらされた。「軍隊が〔ルブリンの〕城市に向かっています」。一同は, これはリトアニアの軍隊ではないかと考えて, 大いに恐れた。コンラートは修道士たち，自分の貴族と配下の者たちとともに，塔の上に駆け上った。ウラジーミル [I1121] の〔配下の〕ドゥナイもかれらと一緒だった。

その軍隊は城市に近づいたところで, それはルーシの軍隊だということが分かった。コンラートは〔その〕軍隊の者たちに訊いた。「この軍隊の軍司令官は誰であるか」。かれらは言った。「ユーリイ・リヴォヴィチ公 [S21] である。公はルブリン〔の城市〕とルブリンの地を自分のものにすることを望んでおられる[54]」。

ユーリイ [S21] が〔ルブリンの〕城市に近づいた。住民たちはかれ〔ユーリイ〕に城市を引

52）この「修道士たちのもとの丘」(на горѣ у мниховъ) は本文では特定されていないが, ルブリンはヴィスチュシツァ川 (Bystrzyca) による谷が町を二分しており，城砦 (zamek) のある左岸（西側）が窪地で低く，右岸（東側）はシフィドニク (Świdnik) という高地になっている。おそらく，コンラートは右岸の高地（「丘」）で修道士（おそらく当時入植していたドミニコ会修道士たち）と共に待機して，対岸の城砦に入る機会をうかがっていたのだろう。

53）このルブリンの住民の「心変わり」については解釈が難しいが，下注 55 を参照。

54）1279 年にクラクフ大公ボレスワフ五世純潔公が没したときも，レフは大公位を望んだが適わず（[イパーチイ年代記 (13)：注 147] [Котляр 2005: C.356] 参照），その後，ハン国の総司令官（ベクリャルベク）ノガイの手を借りて，ポーランドの「辺境地帯」（ルブリンの地を指す）の獲得を画策している [イパーチイ年代記 (13)：注 155]。この度も，同様にクラクフ大公の死を切っ掛けにして，同じ動機によってルブリンに到来したのだろう。次注も参照。

き渡さず，激しく戦う準備をしていた。ユーリイ [S21] はかれらの策略を理解した[55]。かれらはこう言っていた。「公よ，ここに来ても良いことはない。あなたが率いる軍隊は小勢である。多勢のポーランド人がやって来るだろう。あなたは大きな辱めを受けるだろう」。

ユーリイ [S21] はかれら〔住民〕からこの言葉[56]を聞くと，自分の従士たちを〔周辺地に〕放って掠奪をさせた。多くの捕虜が捕獲され，穀物や村は焼かれた。**【*911*】**森の中にさえ何も残らず，すべては軍隊の手で焼かれた。こうして，〔ユーリイの軍隊は〕，多くの捕虜，奴隷[57]，家畜，馬を奪って帰郷した[58]。

【コンラートはクラクフの大公位を諦めて帰国する：1288 年末】

他方，コンラートは帰国の途についた。大きな辱めを受けて，生きていないほうがよかったほどだった[59]。

55）レシェク黒公の死を知ったルブリンの住民の中には，今後は遠いクラクフの大公に服するよりも，近隣のマゾフシェあるいはルーシの公の支配を受けたほうが有利と考えるグループがいて，ヤルタク（上注 46）はマゾフシェ派住民の使者として，コンラートのもとに派遣されたのではないか。他方，ルブリンには，ルーシ派の住民も存在しており，リヴィウのレフ [S2] およびユーリイ [S21] に宛てて，ヤルタクと同類の使者が派遣されたと考えることができるだろう。ユーリイが率いる「小勢」の遠征部隊は，この使者の要請を受けてルブリンへと急行したのではないか。ところが，ルブリンでは，使者たちが派遣された後に，次期のクラクフ大公の支配を受けるべきだというグループが優勢になり，城市の統治を掌握したと考えられる。そのため，リュボムリからルブリンへと向かったコンラート二世は入城を拒否され，ユーリイに対しても「城市を引き渡す」ことを拒んだのだろう。ユーリイが「かれらの策略を理解した」(позна лесть ихъ) というのは，これに続く住民の言葉を聞いて，この事態の変化を意図的な「策略」によるものであり，自分は騙されたと認識したのではないか。そのため，ユーリイはすぐさま方針を変更して周辺地の掠奪に転じ，それに満足して帰還したのである。

56）「この言葉」の原文はイパーチイ写本では «си сла» だが意味が通らないので，フレーブニコフ系写本の読み «си словеса» を採用した。

57）この戦利品（略奪品）リストの中の「捕虜 (полон)，奴隷 (челядь)」の二つを厳密に区別することは難しい。総じて，捕獲した人間はすべて「捕虜」であるが，その中には捕虜交換および身代金と引き換えによって解放される者（身分が高いか裕福な）も含まれている。「捕虜」の中からそのような者を除いて，祖国に連れ帰って，使役，植民，売買，妻として与えるなどの用とした捕虜を「奴隷」と呼んだのだろう。

58）このユーリイ [S21] のルブリン到来と城下の掠奪，帰還は 1288 年 10 月～ 11 月のことと推定される [Грушевський-Хронологія: С.376]。

59）ここでは，非常に強い言葉でコンラート二世の「失望」を表現しているが，上注 55 のような情況の変化を想定するなら，クラクフ大公位の獲得のための支持層を失い，またユーリイ [S21] のような掠奪による獲得物も得られずにむなしく帰郷せざるを得なかったことを言っているのではないか。いずれにせよ，その後のクラクフ大公位を巡るポーランド諸公の権力闘争（次注参照）にコンラート二世は実質的に関与することはなかった。

その後，ポーランドの地では大きな騒乱が起こった[60]。

6796〔1288〕年[61]

【ユーリイ [S21] はウラジーミルに使者を遣ってベレスチエを要求する：1288 年 10 月頃】

ユーリイ・リヴォヴィチ [S21] は，自分の使者を自分の叔父ウラジーミル公 [I1121] のもとに遣って，こう言った。「主人よ，わが叔父よ。いかにわたしが自分のあらゆる信義をもってあなたに仕えてきたか[62]，わたしがあなたを実の父のように思ってきたかについては，神もあなたも知るところです。あなたがわたしの奉仕に不満をもつことなどあり得ないでしょう。主人よ，ところが今，わが父〔レフ [S2]〕がわたしに使者を派遣して，かつてわたしに与えた諸城市, ベルズ[63] (Белзъ) とチェルヴェン[64] (Червенъ) とホルム[65] (Холмъ) をわたしから取り上げようとしているのです。そして，ドロギチン[66] (Дорогычин) とメリニク[67] (в Мѣлницѣ) に座す

60）上注 47 のように，1288 年 9 月 30 日にポーランド大公レシェク二世が子が無いまま没し，このことは次の大公位を巡る権力闘争を必然的に引き起こした。名乗りを上げたのは，レシェク二世の異母弟で，クヤヴィ地方の公ヴワディスワフ〔短身公〕，シェモヴィト一世の息子でマゾフシェ地方プウォツク公ボレスワフ二世，さらにシロンスク地方ヴロツワフ公のヘンリク四世〔高潔公 (Prawy)〕の三人のピャスト朝の諸公だった（コンラート二世は前注のように早々に撤退している）。各地の貴族と都市民を巻き込んだ争いは軍事対立に発展し，1289 年 2 月 26 日，ヴワディスワフ一世とプウォツク公ボレスワフ二世の連合軍が，ヘンリク四世の軍とシェヴィエシュで衝突し，前者が勝利を収めたが，ボレスワフはまもなく大公位を辞退して，ヴワディスワフ一世がクラクフ大公となった。しかし，ヘンリク四世は軍を立て直すと，1289 年 8 月にクラクフを攻撃し，聖職者と市民の協力もあって，大公位を手に入れた [Котляр 2005: С.355-56]。

61）フレーブニコフ系写本にはこの年記（年代表示）はなく，この位置に「その後，数日も経たないときに」(Бысть же посем минувшим не поколицем днем) の文言がある。内容的にも，以下の記事はそれまでの記事と連続しており，この文言はイパーチイ写本が成立した編集の際に削除されて，その代わりに年記が挿入されたものだろう。

62）この「あらゆる信義をもって仕える」(служити со всею правдою) の言い回しは，1287 年の項でムスチスラフ [S4] がウラジーミルに語った言葉の中でも用いられている。定型的な宣誓文言だったのだろう [イパーチイ年代記 (13)：注 304] 参照。

63）「ベルズ」については，[イパーチイ年代記 (13)：注 29] を参照。

64）「チェルヴェン」(Червенъ) については，[イパーチイ年代記 (13)：注 30] を参照。

65）城市「ホルム」(Холмъ) が父レフから与えられたユーリイの所領でかれにとっての拠点地だったことについては，[イパーチイ年代記 (13)：注 174, 231, 263] を参照。

66）「ドロギチン」(Дорогычин) がダニール一族（レフ [S2]）の統治下にあったことについては [イパーチイ年代記 (13)：注 76] を参照。

67）「メリニク」(Мѣлница) については，[イパーチイ年代記 (13)：注 230] を参照。

るようわたしに命令しているのです[68]。わたしは神と自分の叔父であるあなたに叩頭して〔願います〕。主人よ，わたしにベレスチエ[69] (Берестий) を与えて下さい。そのことでわたしが充分〔満足〕になれるように」。

ウラジーミル [I1121] は，使者にこう言った。「こう言え。『甥よ，わしは与えない。そなたは自分で知っているだろう。わしに二言はないことを，かつて嘘をついたことがないことを。神が知っている，また天の下のすべての存在が〔知っている〕。わしは自分の兄弟のムスチスラフ [S4] と結んだ約定を破ることはできないことを。わしはかれに自分の全ての地と城市を与え，自ら文書を書いたのである』」。〔ウラジーミルは〕この言葉を持たせて，自分の甥の使者を送り出した。

【ウラジーミルは使者ラチシャをムスチスラフのもとに遣って，ユーリイの要求について伝える 1288 年 10 月～ 11 月頃】

その後，【***912***】ウラジーミル [I1121] は自分の配下の善良で忠実なラチシャ[70] (Ратчьша) という者を，自分の兄弟ムスチスラフ [S4] にもとに派遣して，こう言った。「わが兄弟にこう言え。『わしの甥のユーリイ [S21] が使者を送って，わしにベレスチエを求めてきた。わしはかれに一つの城市も村も与えなかった。そなたも，何も与えるな』」。そして，〔ウラジーミルは〕自分の寝台から一つかみの藁を手に取ると，こう言った。「またこう言え。『わが兄弟よ，かりにわしがこの藁をそなたに与えた場合でも，それをわしの死後に誰かに与えてはならない[71]』」。

68）このレフによる息子ユーリイの公座の配置換えについては，レフ一族の支配領の拠点であるガーリチやリヴィウから近い三城市（ホルム，ベルズ，チェルヴェン）をより遠い辺境の二城市（メリニク，ドロギチン）に取り替えるのは，確かにユーリイにとって不利な交換であり，ユーリイと父レフの間に何らかの争いが生じた結果のようにも思える。ただし，以下の事態の推移（レフによる使者の派遣など）を見ると，コトリャールが推定しているように，このユーリイの申し出は，レフの意を受けて行ったものであり，父子が共謀してベレスチエを獲得するための口実に過ぎないと考えるべきだろう [Котляр 2005: С. 356-357]。ポーランド語訳注釈も，1289 年 4 月にユーリイがベルズを支配している記事があることから（下注 186）ユーリイの言葉は虚言か曲言であると指摘している [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 251, przyp.1722]。

69）「ベレスチエ」(Берестий)（現ブレスト市）は，古くからウラジーミル [I1121] の父ヴァシリコ [I112] の所領であり，ウラジーミルは世襲領地として相続して支配していた。対ポーランド，ヤトヴャグ人，リトアニア人との関係（外交，遠征，交易など）においては重要な拠点であり，直近ではコンラート公がウラジーミルを訪問するときに立ち寄ったことからも重要性が推察される。

70）「ラチシャ」(Ратчьша) は，フレーブニコフ系写本の読みで，イパーチイ写本は Ратьчя。人名 Ратислав の指小形で，人名の使い方から見て，ウラジーミルの家来で身分の高くない人物だろう。

71）この藁 (солома) を使ったウラジーミルの身振りによる「たとえ話」は文献的な典拠が見付からない。たとえ話としてはよく出来ており，ウラジーミルの知恵者ぶり（下注 78 ～ 80 参照）を示すために年代記記者が実話をもとに書き込んだエピソードか。

ラチシャはムスチスラフ [S4] をストジェク[72] (Стожьк) で見つけて，兄弟〔ウラジーミル〕の言葉をかれ〔ムスチスラフ〕に語った。ムスチスラフ [S4] は，自分の兄弟〔ウラジーミル〕の言葉に対して叩頭すると，こう言った。「あなたはわたしの兄弟であり，わたしの父のダニール王 (Данило король)〔にあたる御方〕です。あなたはわたしを自身の腕の下に受け入れて下さいました。あなたがわたしに命じたことは, 主人よ, わたしは喜んで聞き従います」。そして，ラチシャに贈物を与えて帰郷させた。〔ラチシャは〕戻ってくると，すべてのことを，逐一ウラジーミル [I1121] に語った。

【レフはウラジーミルのもとにペレムィシェリ主教を派遣してベレスチエを求める：1288 年 10 月～ 11 月】

その後，レフ [S2] がウラジーミル [I1121] のもとに，メムノン[73] (Мемнонъ) という名の自分のペレムィシェリ主教を派遣した。かれ〔ウラジーミル〕の配下の者たちは，かれにこう言った。「主人よ，猊下〔主教〕がやって来ました」。かれ〔ウラジーミル〕は言った。「どこの猊下であるか」。かれら〔配下の者たち〕は報告した。「ペレムィシェリからです。ご兄弟のレフ [S2] 様のもとからやって来ました」。ウラジーミル [I1121] は古いこと，前に起こったことを理解する人物で, 何のために〔主教が〕来たかも〔知っていた〕。〔ウラジーミルは〕かれ〔主教〕を呼び寄せる使いを遣った。かれ〔主教〕はかれのもとに入室すると，かれに地面まで深く拝礼して，こう言った **【*913*】**。「ご兄弟〔レフ〕があなたに拝礼しています」。〔ウラジーミルは〕かれ〔主教〕に座るよう命じ，使者の任務をただし始めた。

〔主教は言った〕「主人よ，あなたの兄弟〔レフ〕はこう言っています。『そなたの伯父でわたしの父ダニール王 [I111:S] は，ホルムの聖母教会に埋葬されている[74]。その息子で，わたしとそなたの兄弟であるロマン[75] [S3] とシヴァルン[76] [S5] も，その全ての骨も埋葬されている。兄弟よ。今わたしは，そなたが大きな病気であることを聴いた。わが兄弟よ，どうかそなたの

72）「ストジェク」(Стожьк) は，現在のウクライナ，テルノーピリ州シュムシク区スティジョク村 (Стіжок) に相当する。ムスチスラフ [S4] の拠点城市ルーツクからだと南南東に 73km ほど離れている（[イパーチイ年代記 (12)：注 331] 参照）。ここからムスチスラフの所領だったことがわかる。

73）ペレムィシェリ主教「メムノン」(Мемнонъ) についてはここが唯一の言及個所。リヴォフ（リヴィウ）を拠点にしていたレフ公 [S2] にとって, ペレムィシェリの主教は最も近く, かつ信頼できる人物だったのだろう。諸公にとって最重要の政治的任務を担う使者に，高位聖職者が就くことはルーシ諸公の外交慣例だった。そのことは，次にヴラジミルの前で「座る」ことを許されていることからもわかる。

74）ダニール公 [I111:S] がホルムの聖母教会に埋葬されていることについては，[イパーチイ年代記 (12): 注 421] を参照。

75）ダニール [I111:S] の息子ロマン [S3] は 1260 年頃に没したと考えられるが，本年代記にはその死亡については時も場所もなにも記されていない。この個所でようやく埋葬地が判明することになる。

76）シヴァルン [S5] の死とホルムの聖母教会での埋葬については, [イパーチイ年代記 (13)：注 53] を参照。

伯父と兄弟たちの棺の上の蝋燭を消さないで欲しい。どうか，自身の城市ベレスチエを与えて[77]欲しい。これが，そなたにとっての蝋燭になるであろう』」。

ウラジーミル [I1121] は箴言もたとえも悟る[78]人物だった。〔ウラジーミルは〕主教とともに書物を引きながら多くのことを語り合った。なぜなら，〔ウラジーミルは〕大いなる読書人[79]で哲人[80]だったのだから。そのような者は全土に存在せず，かれの後にも存在しないだろう。〔ウラジーミルは〕主教にこう言った。「兄弟〔レフ〕にこう言え。『レフ公よ。そなたは，無知な人間と思っているのか。このような巧妙さ〔詐術〕をわたしが理解できないとでもいうのか。〔そなたは〕自分の地では少ないから，ベレスチエを望むのか。そなた自身は三つの公領 (княжение) を支配している。それはガーリチ (Галичкое)，ペレムィシェリ (Перемышльское)，ベルズ (Бельзьское) である[81]。そなたはそれで満足できないのか。見よ，わたしの父であり，そなたの叔父〔ヴァシリコ [I112]〕もまた，主教首座であるヴラジミルの聖母教会に埋葬されている[82]。そなたはその〔棺の〕上に充分多くの蝋燭を献げたとでも言うのか？　蝋燭とするために，何らかの城市を与えたことがあったのか？　そなたは**【*914*】**〔前に〕生者たちのために〔ベレスチエを〕要求したが[83]，今度は再び〔同じ事を〕死者のために要求するとは。わた

77）このテキストには，ベレスチエを誰に与えるか示されていないが，文脈や情況から見て，ユーリイではなくレフに与えるということだろう。ここからも先のユーリイの要求が口実に過ぎなかったことが見て取れる（上注 68 参照）。

78）「箴言もたとえも悟る」の「たとえ」に当たる句は，イパーチイ写本では темно слово で，フレーブニコフ系写本では тыхъ много слов と異なった読みを示している。前者の表現は『箴言』1:6 の「人はこれによって箴言と，たとえと，賢い者の言葉と，そのなぞとを悟る」(уразумеет же притчу и темное слово, речения же премудрых и гадания) を典拠にしていることから，明らかにイパーチイ写本の読みが一次的，本来的である。

79）「読書人」(книжникъ) とは，教会や世俗の文献について知識があり，自らも著作をなすような学識・教養のある人物のこと [СДЯ: Т. 4, С. 357-358]。

80）「哲人」はイパーチイ写本では филофъ になっているが，明らかな誤記であることから，フレーブニコフ系写本の読み философъ を採用した。『原初年代記』では聖キリロスとメトディオスや，聖公ウラジーミルにキリスト教を伝えた宣教者などについてこの語が用いられており，意味的には，直前の「読書人」(книжникъ) のギリシア語による言い換えと理解してよいだろう。

なお，後代の歴史文献では，この個所を典拠にして，ウラジーミル・ヴァシリコヴィチ [I1121] の通称（あだ名）を「ウラジーミル哲人公」(Владимир-философ) と呼ぶこともある。

81）この個所でレフ [S2] の所領が三つの公領 (княжение) からなるとウラジーミル [I1121] は見なしていたことが分かる。これは，シヴァルン [S5] の死（1269 年）以降に定まった体制で，この言葉からすると，ホルムやドロギチンなどヴラジミルより北の西ブーク沿岸地帯の城砦をレフ一族が支配することについては，ウラジーミルは認めていなかった（もしくは快く思っていなかった）可能性もある。

82）ヴァシリコ公 [I112] がヴラジミルの聖母教会に埋葬されていることについては，[イパーチイ年代記 (13)：注 3] を参照。

83）息子のユーリイ [S21] を通じて，あたかも「生者」のユーリイのためのような口実をつけて，ベレスチエを要求したことを指している（上注 68 参照）。

しは言う，一つの城市も与えないと。そなたは，わたしから一つの村も得ることはない。わたしはそなたの巧妙さ〔詐術〕が分かっている。わたしが与えることはない』」。ウラジーミル [I1121] は，主教に贈物を与えると，帰郷させた。あたかも，かれのもとに誰も来なかったかのように。

【ウラジーミル公の病状悪化の経緯について】

ウラジーミル・ヴァシリコヴィチ公 [I1121]，大いなる[84]〔公〕は四年間病床に伏していた[85]。われらはかれの病気について次のように語ろう。

かれの下唇が化膿し始めた。最初の年は軽度だったが，二年目と三年目はひどく化膿し始めた。だが，かれにとって重い病気ではまだなく，歩くことも，馬で出かける[86]こともできた。

そして，〔ウラジーミルは〕貧者たちに自分の財産を分け与えた。すべての金銀貴石，黄金や銀の腰帯[87]など，自分の父親のものや自分自身のもの，自分の父親の死後に相続したものすべてを分け与えた。大きな銀製の皿と金製・銀製の杯は，目の前で自らこれを打ち砕き，グリヴナ貨に鋳直した[88]。自分の祖母と自分の母の大きな黄金の首飾りは〔グリヴナ貨〕に鋳直して，施しとして全土に送った。〔馬の〕群れを，馬も持たない貧しい人々やトゥラ・ブカの戦争[89]で〔馬

84）この「ヴァシリコヴィチ，大いなる」(Василькович великом) の句はイパーチイ写本だけの読み。この２語とも敬称の強調であることから，イパーチイ写本編集段階での書き込みと考えるべきだろう。

85）ほぼ 1285 年から没年の 1288 年までのことを言っている。

86）フレーブニコフ系写本では「馬で」(на конѣ) のあとに「望むときには」(когда хотяше) の句が付されている。

87）のちのモスクワ国家時代の 1433 年にヴァシーリイ・ドミートリエヴィチ公の結婚披露宴で，かれの母后ソフィアが来客のドミートリイ・コソイから先祖伝来の腰帯 (пояс) を取り上げ（カラムジン『ロシア国史』第 5 巻 3 章参照），そのことがシェミャカ一族との内争の切掛けになった有名なエピソードがある。おそらく豪華に装飾された腰帯は，伝統的に公の一族においては一種の家宝と見なされていたのだろう。

88）「グリヴナ貨に鋳直す」(полья в гривны) とは，装飾品を貨幣として流通させるために銀塊に改鋳すること。グリヴナはここでは，流通される「お金」くらいの意味。キエフ，ノヴゴロドなどで 165 ～ 200g ほどの銀塊が発掘されており，これがグリヴナと呼ばれたのだろう。ロシアでは，それまでのように輸入銀貨をそのまま流通させるのではなく，12 世紀から輸入銀貨を含め，銀を標準化された銀塊に改鋳する傾向が現れており [Древняя Русь 2015: С. 235: Назаренко Денежно-весовые системы]，その現れと考えられる。

89）「トゥラ・ブカの戦争で」(в Телебугину рать) とは，ジョチ・ウルスのトゥラ・ブカ＝ハンが，アルグイとともに行ったポーランド侵攻（1287 年冬～ 1288 年）のこと [イパーチイ年代記 (13)：注 380] 参照。このとき，トゥラ・ブカと同盟していたウラジーミル配下のヴラジミル人は多くの馬を供出したということだろう（次注も参照）。

が〕[90] 死んだ者たちに分け与えた。

【イラリオンの著作から借用したウラジーミルへの讃詞】

[91] あなたの昼の施し[92]【*915*】と驚くほどの惜しみなさ[93]，それは貧しい者，孤児，病人，寡婦，飢えた者になされたのだが，これについて語り尽くせる者など誰もいないだろう。施しを求める者には，そのすべてに施しをなした。なぜなら，〔あなたは〕主がネヴカドネザル帝に語った次の言葉を聴いていたのだから。「どうぞわたしの忠告をお受けになり，不義を改めて貧しい人に恵みをお与えになってください[94]」。〔あなたは〕これを聴いて，おお，尊敬にあたいする御方よ，聴いたことを実行に移されたのです。すなわち，求める者に与え，裸の者に着せ，飢え渇く者に食べさせ，病気の者にあらゆる慰めを与え，負債で苦しむ者に返済してやったのです。あなたの惜しみなさと施しは，今，人々の間で思い起こされ，よりいっそう神の前，その天使たちの前で〔思い起こされるでしょう〕。その，神に嘉された施しゆえに，あなたは，真のキリストの僕として，神に近づきを得ることができるのです。次のように言う者はその言葉によってわたしを[95]助けてくれます。「憐れみは裁きに勝ち誇り，人への憐れみは印章に等

90）この部分は，ウクライナ語訳，ポーランド語訳，英訳では「戦死した者の遺族に」と訳しているが，文脈から見て不自然であり，иже то（*Ип*. кто）погибли と動詞分詞形が複数になっていることから，ロシア語訳に従って「馬が死んだ」と解釈した。

91）この個所から「…何度も集まり」（下注 99）までの長い段落はすべて，11 世紀後半の『府主教イラリオンの律法と恩寵についての説教』(слово о законе и благодати митрополита Илариона) のウラジーミル聖公を称賛した文言をほぼ文字通り借用している（[БЛДР Т.1: С. 48], 邦訳 [三浦 2012：85-86 頁]）。この借用の切掛けとしては，イラリオンの著作が同名のウラジーミル聖公を称賛しているということもあっただろう。この部分については，フレーブニコフ系写本のテキストの方が，全体としてはイラリオンの著作により近い。そのことも含め，両者のテキストの対応については [Насонов 1969: С. 236-242] を参照。なお，以下に続くウラジーミル公 [I1121] への讃詞でも，イラリオンの著作からの借用が行われている。

92）「夜の施し」(нощныа милостыня) は，イラリオンの著作に読みが近いことから，フレーブニコフ系写本の読みを採用した。イパーチイ写本では，нещаныя милостыня で，これでは意味が通らない。

93）イパーチイ写本，フレーブニコフ系写本とも「驚くほどの惜しみなさ」(дивныя щедроты) になっているが，イラリオンの著作は「昼の惜しみのなさ」(дневныя щедроты) となっている，直前にある「夜」との対比表現である。これは，年代記制作の際の出典の誤記（誤写）に由来しているだろう。

94）旧約『ダニエル書』4:24「王様，どうぞわたしの忠告をお受けになり，罪を悔いて施しを行い，悪を改めて貧しい人に恵みをお与えになってください。」(царю совет мой да будет тебе угоден, и грехи твоя милостынями искупи и неправды твоя щедротами убогих) を典拠としている。

95）この「わたしを」(ми) は人称代名詞短形と解釈すれば，ウラジーミル公になりかわった一人称の使用だろう。もしくは，人称性をほとんど持たない「倫理与格」(dativus ethicus) 的な前接辞としての用法とも解釈できる。

しい[96]」。次の主ご自身の言葉は正しい。「憐れみ深い人々は，幸いである，その人たちは憐れみを受ける[97]」。あなたについての，他の明らかで正しい証言を，われらは聖なる書物から引用しましょう。使徒ヤコブはこう言っています。「罪人を迷いの道から【*916*】連れ戻す人は，その罪人の魂を救い出し，多くの罪を覆うことになる[98]」。あなたは多くのキリストの教会を建て，奉事する者たちを導入しました，コンスタンティノス大帝に匹敵する御方よ，智恵においてもキリストを愛することにおいても同様で，同様にキリストへの奉仕者として尊ばれている御方よ。かれ〔コンスタンティノス大帝〕はニカイア公会議の聖なる教父たちとともに人々の法を定めました。あなたもまた，主教と典院たちとともに大いなる謙抑をもって何度も集まり[99]，この朽ちるべき者〔人間〕のこの世の生についての書物を引用して大いに語り合っていました。

しかし，われらは本来のところに戻ろう。

【重病のウラジーミルの最期の姿：1288 年末】

4 年目が終わろうとして，冬がやって来た[100]。虚弱はひどくなり始めた。かれ〔ウラジーミル〕の頬の肉はそげ落ち，下の歯はみな化膿して，下顎はひどく化膿した。これはまさに第二のヨブ[101]だった。かれは，キリストの大殉教者聖ゲオルギオス教会[102]に入った。自分の聴罪司祭から聖体を受けることを願ったのである[103]。かれが小至聖所に入ると，そこで司祭は自分の祭衣を脱いだ。かれには，いつもそこで立っているのが習慣となっていたのである。かれは座机に座った。なぜなら無力〔病気〕のゆえに立っていることができなかったからである。そ

96）これは，新約『ヤコブの手紙』2:13 の後半部「憐れみは裁きに勝ち誇る」(и хвалится милость на суде) と旧約『シラ書（集会の書）』17:18（邦訳 17:22) の前半部「人の行う施しは，主にとっては印章に等しい」(милостыня мужа яко печать с ним) を結びつけた文言。

97）新約『マタイによる福音書』5:7 からの引用。

98）新約『ヤコブの手紙』5:20 からのほぼ忠実な引用。

99）府主教イラリオンの著作からの借用は上注 91 の箇所からこの個所まで続いている。

100）1288/89 年冬のこと

101）「第二のヨブ」(вторы Иевъ) は旧約『ヨブ記』の主人公にウラジーミル [I1121] を類比したもの。正教会の伝統では，2 世紀のローマの大殉教者聖人エウスタキウス・プラキドゥス（Евстафий Плакида; Eustachius Placidus）の祈祷文や聖人伝などに，この比喩表現が用いられており（例えば [БЛДР T. 3, C. 14; T. 16, C. 327] 参照），そこからの借用の可能性もある。

102）「キリストの大殉教者聖ゲオルギオス教会」(церковь святаго и великаго мученика Христова Георьгия) は，ロシア語訳注によると，ホルムにあった首座教会 (собор) としているが，文脈から判断して，ウラジーミルが没したリュボムリの教会堂のことだろう。ただし，その遺構等は確認できない。

103）正教会の，死を前にした信徒に対する，聖傅機密（елеосвящение, соборование) を執行する，いわゆる「聖傅礼儀」を指している。塗油と聖体礼儀が行われた。

して, 天に向けて両手を広げ, 涙を流して祈りながらこう言った。「《[104]主宰よ, わが主なる【*917*】神よ，わが無力〔病気〕を見つめ，わが謙抑を，今わたしを領して〔苦しめて〕いるものを見よ。なぜなら，わたしはあなたに望みを掛け，耐えているのですから》。《主なる神よ，それらのものすべてについてあなたに感謝します》。わたしが生きているあいだ，〈あなたから善き事を受け取りました。それなら，わたしは悪しきことに耐え得られないはずはありません[105]〉。〈あなたの意に適うことは, そのようになりますように[106]〉。《あなたがわたしの魂を鎮め》,《わたしをあなたの王国に与る者として下さい》。《あなたの至浄なる聖母，預言者，殉教者，全ての真似るに相応しい聖なる教父たちの祈り〔執りなし〕によって。これらの方々は苦しみを受け，あなたに適うことをなし，悪魔から試練を受け，坩堝の中の黄金となりました。それと同じように，主よ，これらの方々の祈りによって，あなたの選ばれた群れに，その右側の羊たちとともに，わたしを与らせて下さい》」。

かれ〔ウラジーミル [I1121]〕は教会から戻ると，横たわって，その後はそこから外に出ることはなかった。ひどく病気で苦しみ始めた。かれの頬からはすべて肉が削げ落ち，頬の骨は腐敗し，喉が見えるほどだった。その後一週間は[107]何も食べず，水を飲むだけで，それも少しずつだった。木曜日を迎える深夜に，ひどく苦しみ初め，明け方になると，[108]自分の苦しんだ霊気が魂から離れていくことを知った。そして，天を見上げ，神を称賛してこう言った。

「不死の神よ，すべてについてあなたを称賛します。あなたは全ての王なのですから。あなたはひとりで真に, その万有の富によってすべての被造物に愉楽を与えてきました。あなたは,【*918*】この世界を創造し，これを守り，自分が送り出した魂を待ち受けています。どうか，よ

104）この段落のウラジーミルの祈りのうち,《　》括弧の中の文言は，1147 年にキエフ人の暴徒に襲われたイーゴリ・オリゴヴィチ [C42] が，死を前にしてテオドロス教会の中で唱えた祈りの文言に対応している（[Стб. 350][イパーチイ年代記 (3)：352 頁] 参照）。自分をヨブの身の上に比定していることも共通している。さらに,『キエフ年代記』1197 年のダヴィド・ロスチスラヴィチ [J3] の臨終の祈りの文言とも共通性が多い（[イパーチイ年代記 (9)：228-229 頁] 参照）。おそらく，これらの文言を借用したものだろう。

105）この〈　〉括弧内は，旧約『ヨブ記』2:10「わたしたちは，神から幸福をいただいたのだから，不幸もいただこうではないか」を改変した引用。

106）この〈　〉括弧内は，旧約『ヨブ記』1:21 の句からの借用。

107）「その後一週間」の原文は，*Ип*. по семь недѣль, *Хлб*. по 7 недел で，そのまま解釈すれば「7 週間のあいだ」となる。しかし，ウクライナ語訳注が指摘するように，すでに「冬」に聖傅礼儀を受けて（上注 103）おり，それから 49 日生きたとなると，12 月 10 日の死亡日（下注 111）と辻つまがあわない。そのためテキストを по семъ неделю と読み替えて, 解釈的に訳した。[Літопис руський, 1989: С. 444, прим. 16]

108）「自分の苦しんだ…」から, 次注 109 の「…共通の負債を支払ったのだった」までは,『キエフ年代記』1197 年のダヴィド・ロスチスラヴィチ [J3] の死の直前の祈りとほぼ共通しており，借用は明らかである（[イパーチイ年代記 (9)：229 頁] 参照）。

き生を生きた者には，神として慰めを与えて下さい。あなたの戒律に従わなかった者は裁きに導いて下さい。なぜなら，あなたの裁きはすべて正義であり，あなたからの生には終わりはなく，あなたは駆け寄って来る者たちには，ご自身の恩寵をもって施しを与えて下さるのですから」。

そして〔ウラジーミルは〕祈りを終えると，両手を天に挙げて，自身の魂を神の手に引き渡した。かれは，自分の祖父と自分の父の仲間に加えられ，生きとし生ける誰も免れることができない万人に共通の負債を支払ったのだった[109]。

【ウラジーミル公は逝去し，遺体はリュボムリからヴラジミルへ運ばれて埋葬式が行われる：1288 年 12 月】

金曜日が明けて，このようにして篤信のキリストを愛する大いなる公ウラジーミル [I1121]，ヴァシリコ [I112] の息子でロマン [I11] の孫である御方が逝去した。父親の跡を継いで 20 年間公支配をした[110]。逝去した〔場所〕はリュボムリの城市だった。6797〔1289〕年[111]12 月 10 日の，師父聖メナス[112] (на святаго отца Мины) の日のことだった。

かれの公妃は館の従僕たちとともにかれ〔の遺体〕を洗い，王者に相応しいようにレースの付いた絹布[113] で包んだ。そして，橇に横たえると，ヴラジミルまで運んだ。住民たちは，老若も男女子供をも問わず，大いに泣きながら自分の主人を見送った。

ヴラジミルの主教座のある聖なる聖母教会に〔遺体が〕運ばれると，橇に乗ったまま聖堂の中に置かれた。**【*919*】**なぜなら，遅かったからである。その日の夕方にすべての〔ヴラジミルの〕城市に公の死について伝えられた。

109）「かれは，自分の…」からのこの一文は，『キエフ年代記』のムスチスラフ [J5]，スヴャトスラフ [J4]，ダヴィド [J3]，ロマン [J1] の死の記事に共通して見られる讃詞の定型句であり，年代記記者はこの部分を参照したのだろう（[イパーチイ年代記 (7)：注 527] 参照）。

110）ここは，ヴァシリコ・ロマノヴィチ [I112] の没年を推定する根拠となる部分で，1269 年と推定されている（[イパーチイ年代記 (13)：注 60] 参照）。

111）この「6797 年」の年記はフレーブニコフ系の写本にも記されている。これは，9 月始まるビザンツ式暦では西暦換算で 1288 年 9 月 1 日～ 1289 年 8 月 31 日に相当し，この紀年法で記されたと考えられ，ウラジーミルの命日は 1288 年 12 月 10 日である（[Толочко 2015: C. 88-90] 参照）。この日は確かに金曜日に当たっている。

112）「聖メナス」(Мина, Μηνάς, Menas, Mina, Mena, Mennas; 285-309 年) は，エジプト，アレクサンドリアの殉教聖人。祝祭日は 12 月 10 日。

113）「レースの付いた絹布」(оксамит со круживомъ) の「絹布（オクサミト）」はギリシア語 ἑξάμιτος からの音訳借用語で，表面を加工した（ビロードやあや織りなど）絹布のこと。当時，絹布は非常に貴重でおそらくビザンツ伝来のものだったろう。「レース」（現代語では кружево）はその布の縁取り装飾のことだろう。[Энциклопедия СПИ Т.4: Оксамит: С. 348-349] を参照。

翌日，早課の祈禱が終わると，かれの公妃[114] がやって来た。かれの妹のオリガ[115] (Олга) と修道女の公妃エレーナ[116] (Олена) が大いに泣きながらやって来た。そしてすべての城市〔の住民が〕集まった。貴族も古参や新参の者たちが，かれ〔ウラジーミル〕を思って泣いた。ヴラジミル主教エフシグニイ[117] (Евьсѣгнѣй) と，すべての典院たち，洞窟修道院典院アガピト[118] (Огапитъ)，全市の司祭たちは，かれのために通常の聖歌[119] を唱った。そして，良く称賛する歌と薫り高い香をもってかれを送り，かれの遺体を父親の墓所に安置した[120]。ヴラジミルの人々は，自分たちへのかれの愛顧を思ってかれを偲んで泣いた。かれの従僕たちは，いっそうのことかれを偲んで泣き，その顔を涙で濡らしていた。かれらは，かれ〔ウラジーミル〕に最後の奉仕を行い，かれの遺体を布で巻き，棺の中に収めた。12 月 11 日柱頭行者聖ダニエル[121] (Данил Столпъникъ) の記念日の土曜日のことだった。

公妃〔オリガ〕は絶え間なく泣き，棺の前に立って，涙を水のように流し続けていた。そして，

114）「かれ〔ウラジーミル〕の公妃」のオリガ（次の妹と同名である [イパーチイ年代記 (13)：注 307]）については，かれの臨終の前の出来事に何度も登場し，聡明な女性として描かれている。

115）このヴァシリコ公の娘オリガは，1259 年にチェルニゴフ公アンドレイ・フセヴォロドヴィチ [C412211]（もしくは [G42]）に嫁いだが（[イパーチイ年代記 (12)：注 323]），おそらく死別して故郷のヴラジミル＝ヴォルィンスキイで暮らしていたと考えられる。

116）この「修道女の公妃エレーナ」(княгини Олена, черничи) は，ロシア語訳注によれば，ハンガリー王ベーラ四世の王女で，レフ [S2] に嫁いだコンスタンツァ（[イパーチイ年代記 (11)：注 485] 参照）のことで，後にマウォポルスカのソンチ（Sącz) の聖クララ修道院で修道女になったとしている。ウクライナ語訳注は，ロマン・ダニーロヴィチ [S3] の寡婦となった妃（再婚相手でヴォルコヴィエスク侯グレーブの娘）のことではないかと推定している [Літопис руський, 1989: C. 444]。

ただ，コンスタンツァやロマンの寡婦がこの時にヴラジミルに居合わせたことが，いかにも不自然であることから，原文の книгини Олена, черничи を編集の後の段階での挿入と見なして，先の「かれの公妃」（上注 114）(княгии его) と同一人物を指しており，これに対する説明（「のちに修道女エレーナとなった公妃））と解釈したほうが自然ではないか。なお，英訳注は父ヴァシリコ [I112] の妻（すなわちウラジーミルの母になる）としており，かの女はたしかにエレーナという名だが，すでに 1264 年に没している（[イパーチイ年代記 (13)：注 2] 参照）。

117）ヴラジミル主教「エフシグニイ」については，[イパーチイ年代記 (13)：注 295] を参照。

118）「洞窟修道院典院アガピト」(Огапитъ, печерьский игуменъ) は，キエフ洞窟修道院で，おそらく前任のセラピオンが主教になった 1273 年から修道院長（典院・掌院）の職に就いていた人物 [Карпов 2017: C. 23]。このときヴラジミルに滞在していた理由は不明だが，洞窟修道院とヴラジミル主教座との繋がりの深さを示している。

119）「通常の聖歌」(обычныа пѣсни) については [イパーチイ年代記 (13)：注 276] を参照。

120）ウラジーミル [I1121] の父ヴァシリコ公 [I112] の遺体がウラジーミルの主教座聖母教会に安置されていることについては [イパーチイ年代記 (13)：注 61] を参照。

121）「柱頭行者ダニール」(Данил Столпъникъ; Δανιήλ τοῦ Στυλίτου) は 5 世紀後半のメソポタミアの修道士で柱頭の行という厳しい修行を自らに課した聖人。ルーシでの崇拝は古くから始まっていた。祝祭日は 12 月 11 日で，この日の早朝にリュボムリから遺体を載せた橇が出発し，50km ちかい道程を運んで当日にはヴラジミルに到着したことになる。

次のように呼ばわりながら言った。「わたしの，至福で慎ましく温順な正義の王よ。あなたはまさに真に【*920*】イヴァン[122] (Иван) という洗礼名を得ていたのです。かれにはあらゆる徳が相応しいのですから。あなたは，自分の親族たちから多くの誹りを受けました。しかし主人よ，あなたがかれら〔親族たち〕の悪意に対して逆らったり，悪をもって報復しようとしたところも，わたしは見たことがありません。あなたは，すべての事を，神に委ねていたのです[123]」。

[124]〔遺体を〕見送りながら，かれ〔ウラジーミル〕のことをもっとも泣き悲しんだのは，ヴラジミルの上層の有力者たち (лѣпшии мужи) だった。かれらはこう言った。「われらの善き主人様よ。〔われらは〕あなたとともに死ぬべきでした。あなたの祖父ロマン [I11] が，〔われら〕すべてをあらゆる侮辱[125] から救い出したように，あなたは救い出してくれました。われらの主人よ，あなたはこの事業に力を尽くし，自分の祖父が敷いた道を引き継いで歩んでこられたのです。主人よ，今はもう，あなたを見ることはできません。われらの太陽が沈んでしまったのですから。そして，われらは全ての者から侮辱を受けています」[126]。

[127] このようにして非常に多数のヴラジミル人が，かれのことを泣き悲しんだ。男も女も子

122）このウラジーミルの洗礼名の「イヴァン」がどの聖人に当たっているか，すなわちかれの守護聖人は誰であるかについては，ウクライナ語およびポーランド語訳は特定する手段がないとしている（可能性としては金口イオアン，神学者ヨハネ，洗礼者ヨハネなどがあるが）。ロシア語訳注は，金口イオアンから受けた名としているが，論拠は示されていない。この解釈はおそらく，伯父にあたるダニール [I111:S] の，金口イオアンへの熱烈な尊崇（[イパーチイ年代記 (12)：注 278] 参照）から類推したものだろう。

123）以上のカギ括弧内の公妃オリガの嘆きの言葉は，『キエフ年代記』の 1180 年の項のロマン・ロスチスラヴィチ [J1] の死の記事の中の，その公妃の嘆きの言葉とほぼ一致しており，洗礼名（出典元は「ロマン」）や誹りを受けた相手（同「スモレンスク人」）が取り換えられているだけである（[イパーチイ年代記 (7)：255 頁] 参照）。『キエフ年代記』記事からの借用は明らかである。

124）この個所から「侮辱を受けています」（下注 126）までの段落の全体は，『キエフ年代記』1178 年のムスチスラフ勇敢公 [J5] の死亡記事 [Стб. 610] におけるノヴゴロドの有力者についてとその嘆きの言葉を換骨奪胎して構成したもので，明らかな借用である（[イパーチイ年代記 (7)：243-244 頁] 参照）。

125）「侮辱」の原語は *Ип*. обидъ; *Хлб*. бѣдъ（複数生格形）だが，文脈や出典における読みから判断して前者の読みを採用した。中世ロシア語で обида は，相手から受けた具体的な侵害，加害を意味している。

126）「〔遺体を〕見送りながら…」からここまでが『キエフ年代記』からの借用（上注 124）。「上層の有力者たち」(лѣпшии мужи) も実態を指しているのではなく，典拠にある「ノヴゴロドの」を「ヴラジミルの」に取り換えただけである。「祖父ロマン」は典拠の「祖父フセヴォロド」を取り換えている。

127）この段落の泣き悲しむ人々の描写も，前の段落と同様に，「ノヴゴロド人」を「ヴラジミル人」に換えて，『キエフ年代記』1178 年のムスチスラフ勇敢公 [J5] の死亡記事 [Стб. 610] を借用している。

供も，ドイツ人[128]もスーロジ人[129]もノヴゴロド人もユダヤ人[130]も泣いていた。あたかもエルサレムが占領されて，かれら〔ユダヤ人〕がバビロンに捕囚となって連れ去られた時のように[131]。乞食も貧しい者も，修道士と修道女たちも〔泣いていた〕。〔ウラジーミルが〕すべての乞食たちを憐れんでいたからである。

この篤信の公ヴラジミル [I1121] は，背が高く，肩幅が広く，容貌は美しく[132]，黄色の**【*921*】**巻き毛を持ち，顎髭は刈り揃えており，美しい腕と脚を持っていた。かれの話す言葉の〔声は〕太く，下唇は厚かった。書物からの〔引用を〕はっきりと口にした。なぜなら，大いなる哲人[133]だったからである。また，巧妙で勇敢な狩人だった[134]。

温順で慎ましく，悪意を持たず，義に篤く，賄賂を取らず，嘘をつかず，泥棒を憎み，成長して〔大人になって〕からも酒を飲むことはなかった。万人を愛し，とくに自分の兄弟たち〔を愛し〕，十字架接吻〔の誓い〕においてはあらゆる真の正義を守り，狡猾ではなく，神への畏れに満たされていた[135]。

かれは何よりも慈悲を最初に置いており，修道院を建設し，修道士たちを慰め，すべての典院たちを信愛をもって受け入れた[136]。

多くの修道院を建設した。すべての教会の位階に属する者たち，教会人たちのために，神はかれの心と眼を開いた。〔ウラジーミルは〕自分の理性を酩酊で曇らせることはなく，修道士，

128）ヴラジミルに「ドイツ人」(нѣмци) の商人が住んでいたことについては，上注 26 を参照。

129）「スーロジ人」(*Ип*. сурожьцѣ; *Хлб*. сърожци) は「スーロジの海」(Сурожское море) すなわち，アゾフ海と黒海北岸一帯からやってきた商人たちを指している。Сурож は現在の都市スーダク (Судак) の古名で，古代・中世の黒海・地中海貿易の中心地の一つだった。ポーランド語訳注は，イタリア人（ヴェネチア人）商人だった可能性を指摘している [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 257, przyp. 1782]。

130）「ユダヤ人」(жидове) はヴラジミルに滞在していたユダヤ人商人を指している。

131）「ドイツ人も…」からここまでの文言は典拠（上注 127）にはなく，年代記記者独自の書き込みかもしれない。「ドイツ人，スーロジ人，ノヴゴロド人，ユダヤ人」は実際にヴラジミルに居住していた特権商人たちを指しているだろう。

132）「この篤信の…」からここまでのヴラジミル公の外貌描写は，『キエフ年代記』のロマン・ロスチスラヴィチ公 [J1] の死亡記事における，その外貌描写の表現 [Стб. 617] とまったく一致しており，明らかな借用である（[イパーチイ年代記 (7)：255 頁] 参照）。これ以降の描写表現はこの出典にはなく，実態に基づいているのかもしれない。

133）ウラジーミルが「哲人」(философъ) とされていることについては，上注 80 を参照。

134）ここでは「巧妙で勇敢な狩人」(ловечь хитръ хоробръ) だが，上の記事ではウラジーミルについて「良い勇敢な狩人」(ловечь добр, хоробръ) であると形容している。上注 33 を参照。

135）この段落の「温順で…」からここまでは，上注 132 と同じく，『キエフ年代記』のロマン公 [J1] の性格描写 [Стб. 617] をもとにして，それに「酒」や「十字架接吻」を付け足して作文している。

136）「かれは何より…」からここまでは，この段落の泣き悲しむ人々の描写も，前の段落と同様に（上注 124, 127）『キエフ年代記』1178 年のムスチスラフ勇敢公 [J5] の死亡記事の表現 [Стб. 611] を借用している（[イパーチイ年代記 (7)：244 頁] 参照）。

修道女，貧しき者たち，すべての位階の者たちの養い手であり，それはあたかも父親として愛するがごときだった。かれは何よりも施しにおいて慈悲深く，主〔なる神〕が言った言葉に聴き従っていた。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは，わたしにしてくれたことなのである」[137]。またダビデは言っている。「恵みを施し，貸し与える者は幸いなり。主に従うものはとこしえに揺らぐことはない[138]」かれ〔ウラジーミル〕の中に雄壮さと知性が息づき，正義と真実がかれとともに歩き，他の徳性も【*922*】かれの中に多くあった。〈かれの中に傲慢さはなかった。なぜなら，神と人間の前で傲慢さは滅せられていたからである[139]〉。常に心を悲しませることで自らの姿を慎ましくなし，こころから息を吐き出し，眼から涙を流し，ダビデの悔恨[140]を受け入れ，自分の罪について嘆き，朽ちるものよりも朽ちぬものを愛し，時とともにあるものよりも天上のものを愛し，この地上の王国の過ぎゆくものよりも全能の神のもと聖人たちと共にある王国を愛した[141]。

[142] あなたが生前有していた篤信ゆえに，主は天上においてあなたを〔そこに〕与る者となした。あなたの篤信の良い証人，おお，至福なる者よ[143]，聖なる聖母マリアの教会よ。あなたの曾祖父〔ムスチスラフ [I1]〕がこれを正教の基の上に創建し[144]，そこでは雄壮なあなたの遺

137）カギ括弧内は，新約『マタイによる福音書』25:40 からの引用。

138）カギ括弧内は，旧約『詩編』111:5-6（邦訳 112:5-6）からの抜粋的な引用。なお「憐れみを施し（…）幸いである」の文言は，『原初年代記』6504(996) 年のウラジーミル聖公についての讃詞にも使われている（[ПСРЛ T. 1，1997: C. 125][ロシア原初年代記：139 頁]）。

139）〈　〉括弧内の文言はアンドレイ愛神公への讃詞の典拠（下注 141）にはなく，本年代記の記者の創作によるものと考えられる。

140）「ダビデの悔恨」(покаяние Давыдово) とは，ダビデが，ウリヤの妻バト・シェバを得るために，ウリヤを欺いて激戦地に派遣してこれを死なせるように仕向けたが，その後，このことを大いに嘆いたエピソードを指している（旧約『サムエル記下』11 ～ 12 章参照）。なお『詩編』50 章（邦訳 51 章）はそれについての悔恨の歌とされている。

141）この段落の初めの「多くの修道院を建設した…」からここまでの長い文言は，一部を除いて（上注 139 参照）『キエフ年代記』1175 年の項にあるアンドレイ愛神公への讃詞 [Стб. 583] と対応しており，ここからの借用と考えることができる（[イパーチイ年代記 (7)：208-209 頁] 参照）。

142）この個所から「主はあなたとともにある…」までの長い段落は，再度（上注 91）イラリオンの著作のウラジーミル聖公への讃詞をほぼ忠実に借用している（[БЛДР T.1: C. 50], 邦訳 [三浦 2012：87 頁]）。

143）「至福なる」は，原文では（*Ип.*, *Хлб.* とも）обителниче（住む処よ）になっているが，意味に無理があるので，典拠のイラリオンの著作のテキストにある о блажениче（おお，至福なる者よ）の読みを採用した。引用のための転記の際の誤記によるものだろう。

144）これはヴラジミル＝ヴォルィンスキイの聖母教会（聖母就寝教会）のことを指している。ウラジーミル [I1121] の曾祖父にあたるムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] がこの教会を創建したことについては，[イパーチイ年代記 (7)：注 32; (13)：注 3] を参照。

なお，「あなたの曾祖父」(прадѣдъ твой) は，本年代記記者による加筆で，典拠のイラリオンの著作では，キエフの「十分の一（デシャチンナヤ）教会聖母教会」を指しており，創建者はウラジーミル聖公 [06] 自身になっている。

骸が横たわって，大天使の喇叭を待っている。また〔あなたの篤信の〕非常に良い証人は，あなたの兄弟のムスチスラフ [145] [S4] である。主はあなたの支配の後に，かれをその代理人とした。あなたの規則を破ることなく，これを固め，あなたの篤信の行いを縮小することなく，これを付け足し，罰するのではなく，正しくするのである。あなたの未完の〔事業を〕正しくする。それはあたかもソロモンがダビデになしたのと同じである。そして，神の偉大で神聖な家をその智恵によって建て [146]，あなたの都市を聖化し浄化した。〔あなたは〕あらゆる美しいもの **【*923*】**，黄金，銀，宝石，尊い器物で〔神殿を〕飾った。そのように教会はあらゆる方向から見て驚くべき栄えあるものとなり，東から西に至るすべての北の国でこれに相当するものは見当たらない [147]。そして，あなたの栄えある城市ヴラジミル [148] は，その雄偉を冠のように身に付けている。〔あなたは〕あなたの民と城市を，神聖にして栄えある，キリストの素早い助け手である聖母に引き渡した。どうか，大天使〔ガヴリエル〕が聖母に与えた敬意が，この城市にも与えられますように。あの御方〔聖母〕には「喜べや，喜ばしき者よ，主はあなたとともにある [149]」〔と讃えた〕。城市〔ヴラジミル〕には「喜べや，篤信の城市よ，主はあなたとともにある」〔と讃えよう〕。

立ち上がれ，あなたの棺から。おお，尊い頭（かしら）よ。立ち上がれ，夢を払え，あなたは死んでいたのではなく，万人が立ち上がる〔復活〕まで眠っているのだから。立ち上がれ，あなたは死んだのではないのだから。あなたは死なずに，キリストを，全世界に命を与えた御方を善く信じたのだから。夢を払え。眼を上げよ。あなたは見てきた。主が，どのような名誉をそこ〔天上〕であなたに相応しいものとしたかを。〔他方，主は〕地上において，あなたの兄弟ムスチスラフ [S4] によって記念を残した。立ち上がれ，見よ，あなたの地を美しくした，

145）「あなたの兄弟のムスチスラフ」(брат твой Мьстилавь) は，典拠（前注）で「あなたの息子ユーリイ [13]」(сынъ твои Георгии) となっているところを，実態に合わせた改変が加えられている。

146）これは，典拠のイラリオンの著作では，ヤロスラフ [13] によるキエフのソフィア聖堂 (Софийский собор) の建設（『原初年代記』1037 年記事参照）を指している。「神の偉大で神聖な家をその智恵によって建て」(в домь Божий великый и святый его мудростью созда) の句は，旧約『箴言』9:1 の「叡智は家を建て」(премудрость созда себе дом) から取ったもので，教義としては，「叡智」(σοφία; София, Премудрость) の神的な属性を根拠づけるものとされ，ソフィア聖堂の命名の典拠ともなっている。しかし，この文章の文脈上の主語であるムスチスラフ [S4] には，これにあたる建設事業はない。借用による編集上の無理と理解する他はないだろう。

147）この段落の，ヴラジミルの聖母教会にかかわる讃詞は，『キエフ年代記』1197 年の項のダヴィド・ロスチスラヴィチ [J3] への讃詞とも類似している [Стб. 703-704]（[イパーチイ年代記 (9)：注 60] を参照）。ただし，ここではイラリオンの作品からの影響（上注 142）が一次的だろう。

148）借用典拠のイラリオンの著作では「キエフ」を指している。「冠」(вѣнец) の比喩によって，支配者としてのウラジーミル公と都市としてのヴラジミルの二つを掛けた修辞が成立している。

149）新約『ルカによる福音書』1:28 の受胎告知のエピソードからの引用。

あなたの兄弟〔ムスチスラフ〕を[150]。

*[151]かれ〔ムスチスラフ〕の甘い顔の光景に満足しながら，祈れ。自分の兄弟〔ムスチスラフ〕の地のために，あなたがかれに引き渡した〔地のために〕。人々のために。あなたは，篤信によってかれらを支配したのだから。どうか，あなたはかれら〔人々〕を平和のうちに，篤信のうちに守るように。**【924】**どうか，篤信によってかれ〔ムスチスラフ〕が称賛されるように。どうか，主なる神があらゆる戦争と裏切りから，飢餓と異族の襲来から，内争の戦争から〔ムスチスラフを〕守られるように[152]。さらに自分の兄弟ムスチスラフについて祈れ[153]。〔かれが〕神によって与えられた民を，惑わされることなく善き行いによって統べるように。〔かれが〕全能の神の玉座の前に，あなたとともに恥じることなく立てるように。〔かれが〕かれの民を導く困難を〔克服した〕ゆえに，かれ〔神〕から朽ちぬ栄光の栄冠を，すべての義人たちとともに受けることができるように。アミン[154]。*

これに加えて，見よ，自身の篤信の公妃を。あなたの遺言にしたがって，〔かの女が〕いかに篤信を保っているかを。いかにあなたの名の前に拝礼しているかを[155]。

〔かの女は〕知っている，主は肉体ではなく魂によってあなたにすべてのことを示したことを。あなたの播かれた信仰の種が，不信仰の酷暑によって枯れ果てることなく，神の助けの雨によっ

150）この段落もイラリオンの著作に忠実に対応している。典拠ではウラジーミル聖公に対する，命令形を多用した呼びかけだが，ここではウラジーミル公 [I1121] への呼びかけになっている。

151）以下の「かれ…」から「アミン」までの段落の斜体で示した長い文言は，イパーチイ写本からそっくり欠落しているテキスト。フレーブニコフ写本（底本テキスト [ПСРЛ Т. 2, 1998: Стб. 923]）によって翻訳した。

この部分も前後の部分と同様に，イラリオンの著作のほぼ忠実な借用になっている。典拠が同じであることと，借用の手法が類似していることから，この部分は後代の挿入ではなく，イパーチイ写本の初期の伝播段階での原本からの偶然的欠落（内容的から判断して意図的削除は想定し難い）による可能性が高い。

152）守護を願う厄災の列挙「あらゆる戦争と裏切りから，飢餓と異族の襲来から，内争の戦争から」(от всякоя рати и преданиа, и от голода, нашествиа иноплеменникь, и от усобныа рати.) は，典拠のイラリオンの著作では，「あらゆる戦争と虜囚の身から，飢餓とあらゆる悲しみと屈辱から」(от всякоа рати и плѣнениа, от глада и всякоа скорби и сътужденіа) となっている。対応していない「裏切り」(предание),「異族の襲来」(нашествие иноплеменник),「内争の戦争」(усобная рать) は年代記記者による，現実を参照した改変である。

153）この「自分の兄弟ムスチスラフについて」の個所は，典拠のイラリオンの著作では「あなたの息子，篤信のわれらのカガン，ユーリイ」(о сынѣ твоемь, благовѣрнѣмь каганѣ нашемь Георгии) となっている。なお，この個所で，典拠の文言が二，三行省略されて借用されている。

154）「アミン」の語はイラリオンの著作にはない。

155）この段落の表現もイラリオンの著作を改変して借用している。典拠ではウラジーミル聖公の嫁イリーナ (Ерина)（ヤロスラフ賢公の公妃）のことを言っているが，ここではウラジーミル公 [I1121] の妃オリガのことになっている。

て，大いに実りをもたらすことを[156]。

喜べや。われらの教師よ，篤信の導き手よ。あなたは，正義を〔衣服として〕まとい，固い意志を〔腰帯として〕締めていた。お金（グリヴナ）や黄金の装飾のような慈悲によって，身を飾り，真理をまとい，道理を冠としていた。おお，尊い頭（かしら）よ，あなたは裸の者にとっての衣服だった。あなたは，飢える者を食べさせ，渇する者の腹を冷たくし，寡婦たちの助け手，巡礼者を休ませる者，庇護のない者の庇護者，侮辱された者の守り手，貧しい者の与え手**【*925*】**，巡礼を受け入れる者だった。〔あなたは〕その他の至善なる行いによって，天上において報償を，至福を受けている。「その〔至福は〕神が，父と子と聖霊を愛する者たちに準備したもの」[157] なのである[158]。

【ウラジーミル公の業績。カメネツ城市の建設とその教会への奉納品について】

ウラジーミル公 [I1121] は自分の公支配のあいだに，自分の父〔ヴァシリコ [I112]〕にならって，多くの城市を建設した。ベレスチエ[159] (Берестий) を建設し，ベレスチエの次には，ロスナ[160] (Льстнѣ) と呼ばれる荒れ地の中に城市を建設して，これにカメネツ[161] (Каменець) という名を与えた。なぜなら，石の多い土地だったからである。この〔城市に〕高さ 17 サージェンの石造りの塔[162] を建造した。これを観る者全員が驚くに値するものだった。

そして，聖なる聖母の受胎告知の教会を置き，これを黄金〔で飾った〕聖像画 (ｲｺﾝ) で飾った。銀製の奉事のための聖具を鋳造させ，アプラコス[163] 福音書〔の書物を〕銀で表装させた。

156）この段落も，イラリオンの著作のイリーナ（前注）についての部分の表現の全面的な借用である。

157）この括弧内の文言は，新約『コリントの信徒への手紙 1 』2:9 からの引用の改変。

158）この段落も，イラリオンの著作のウラジーミル聖公への讃詞の表現のほぼ全面的な借用である。

159）「ベレスチエ」(Берестий) は現在のベラルーシの都市ブレストに相当し，『原初年代記』1019 年の項にはすでに言及がある。もちろん，ウラジーミル公が建都したものではない [Нерозонак 1983: С. 19]。この「建設した」(зруби) は，ゼロから城市を創建するのではなく，城塞や城柵を新たに築いたということだろう。

160）「ロスナ」(Льстнѣ) は川の名称。これについては，[イパーチイ年代記 (13)：注 111] を参照。

161）「カメネツ」(Каменець) は，ベレスチエから北へ 40km ほど行ったところにある城市で，先の 1276 年の項にウラジーミル公による都市建設の物語が記されている（[イパーチイ年代記 (13)：注 112] 参照）。

162）この「塔」(столп) は石造りの城塔（天守塔）を指し，当時のサージェン (сажень) は，片手を前方に伸ばした長さのおよそ 74cm に相当する（[イパーチイ年代記 (12)：注 286] 参照）とすると，17 サージェンは 13m ほどの高さになる。

163）アプラコス (Апракос) とは，奉事に用いる経典としての『福音書』および『使徒書』（「使徒行伝」と使徒書簡集）で，テキストが聖書の配列ではなく，復活祭から始まって，奉事で読み上げる順番に配列された書物。

アプラコス使徒書, パレミヤの書[164], 自分の父〔ヴァシリコ [I112]〕の雑纂[165] もここに置いた。【*926*】挙栄用の十字架[166] も置いた。

【ベリスクの教会への奉納品について】

また，ベリスク[167] (Бѣльск) では教会に聖像画 (ｲｺﾝ) に書物を置いた。

【ヴラジミルの教会・修道院への奉納品について】

〔城市〕ヴラジミルでは，聖ドミートリイ教会全体に〔壁画を〕描がかせ，奉事用の銀器を鋳造させ，聖母の聖像画（イコン）に宝石で飾った銀覆いを付し，福音書を筆写させ，帳を金糸で刺繍し，他の絹生地の〔帳〕は粒真珠を刺繍し，それ〔教会〕をあらゆる模様で飾った。

主教首座の聖母教会には大いなる救世主の聖像を銀で覆い，福音書を筆写させ，その本を銀で表装させた。そして，これらを聖母教会に与えた。アプラコス使徒書を筆写させ，聖母教会に与えた。金で焼成し宝石で飾った奉事の器も聖母教会に与えた。宝石で飾って金の縁取りした救世主の聖像は，自分の記念のために聖母教会に奉納した。

自分の聖使徒修道院[168] には，アプラコス福音書と〔アプラコス〕使徒書を与えた。自分の父の大きな雑纂本[169] も，自らこれを写して，この〔教会に〕奉納した。また，挙栄用の十字架も祈禱書も〔修道院に〕与えた。

【ペレムィシェリ，チェルニゴフ，ルチェスクの教会への奉納品について】

ペレムィシェリの主教首座〔教会〕には，真珠で飾った銀覆いで表装したアプラコス福音書

164）「パレミヤの書」(Парамья) は，паремейник とも言い，教会奉事の晩課の中で読まれる旧約聖書の断片が収録されている経典。祭や大斎，受難週間の時に，その日の聖人や祭，斎に関連した（主に預言や予型として）箇所が選択され収録されている。

165）「雑纂」(съборникь) は様々な種類の文章（ここでは教会の奉事で唱える祈祷文だろう）を集めて書物にしたもの。

166）「挙栄用の十字架」(крест въздвизалный) については，上注 28 を参照。

167）ベリスク (Бѣльск) は, 現在のポーランドの都市ビエルスク･ポドラスキ（Bielsk Podlaski）に相当し，ベレスチエ（ブレスト）からは，北北西へ 82km ほど離れており，ヤトヴャグ人およびリトアニア人支配地に隣接していた（[イパーチイ年代記 (12)：注 100] 参照）。ウラジーミル [I1121] がこの城市を支配していたことはこれまでの記事になく，この教会についても詳細は不明。

168）ウラジーミル公が自分のための創建した「聖使徒修道院」(свои Апостолы) については上注 14 を参照。

169）上注 165 にあるカメネツの教会に奉納した父ヴァシーリイの雑纂 (сборник) の写本を作成して，自分の聖使徒修道院に納めたということ。

を与えたが，それも自分で[170]書写したものだった。

〔ウラジーミルは〕チェルニゴフの主教首座〔教会〕に[171]アプラコス福音書を送ったが，それは金〔金泥・金箔〕で〔細密画などが〕描かれ，真珠で飾った銀覆いで表装されていた。その〔表紙の〕真ん中にはエナメルの救世主〔の像が描かれていた〕。

ルチェスク[172]の (Луцкий) 主教首座〔教会〕には，大きな銀製で金メッキをした十字架を与え，そこには尊い〔十字架の〕樹の〔聖遺物〕が納められていた。

【リュボムリの聖ゲオルギオス教会の創建と教会への奉納品，聖母教会の修復について】

〔ウラジーミルは〕多くの教会を建設した。リュボムリでは，キリストの大殉教者ゲオルギオスの石造りの教会堂を創建し，これを〔銀〕覆いのある聖像画 (ｲｺﾝ) で飾った。また，奉事の銀器を鋳造させ，絹布の代案を，金糸と真珠で刺繍させ，ケルヴィムとセラフィム〔を描き出した〕。宝座の覆い (иьдитья) は，全体を金糸で縫ったものだった。他の〔覆いは〕白い絹織物で，小さな祭壇には，白い絹織物の二枚の覆いを〔与えた〕。また，アプラコス福音書を書写させ，その全体を黄金と宝石と真珠で飾った。その〔本の〕表紙には〈とりなしの三体像〉(деисус) が飾られ，エナメルの大きな丸飾りが付いており，驚くべき光景だった。もう一冊のアプラコス福音書は，金糸織りの絹布 (оловир) で表装されており，丸飾りはエナメルではなく，そこには聖殉教者グレーブとボリスが〔描かれていた〕。アプラコス使徒書と簡約月課経[173](прологы)〔を書写させた〕。そこには 12 の月の分が書写され，聖なる教父たちの聖人伝，聖なる殉教者たちの行伝，キリストのために〔流した〕血によっていかにして〔聖人の〕栄冠を受けたかが記されていた。また，月課経 (мѣнеи)[174] を 12 冊〔12 の月の分〕書写した。三歌

170）ほぼこの個所でポゴージン写本は終わっている。

171）ウラジーミル [I1121] の姉妹オリガは，1259 年にチェルニゴフ公アンドレイ [C412211] と結婚しており（[イパーチイ年代記 (12)：注 419] 参照），この時はアンドレイはすでに没していたにせよ（上注 115），ウラジーミルの一族はチェルニゴフ諸公と姻戚関係を保っていた。豪華な福音書を送ったのもその関わりである。

172）「ルチェスク」(Луцк) はムスチスラフ [S4] の公支配の拠点地だった。ウラジーミル [I1121] が十字架を送ったのは，ムスチスラフとの関係が安定した以降のことだろう。

173）「簡約月課経」(прологы) は，原義は「序文」の意味で，ギリシア語のシナクサリオン (Συναξάριον) にあたり，「月課経」(минея)（次注）を簡約した文集を指している。内容的には，簡約された聖人伝や教父たちの説教が，記念される月と日付ごとに収録されている。月ごとに一冊になっていることから「12 冊書写した」のである。

174）「月課経」(мѣнеи) は，ギリシア語のメノロギオン (Μηναίον) に相当し，一年の中の日付を基にして構成されている典礼書，各種祭日・斎日，聖人の記念日，特定のイコンの記念日などにあたっての祈禱文が収められている。やはり，月ごとに一冊になっている。

経[175] (триоди), 八調経[176] (охтаи), 連接歌集[177] (ермолои) を〔書写させた〕。また，聖ゲオルギオスの奉事経[178] (служебникъ) を書写させ，晩課や早課の祈禱や，特別な祈禱書 (молитвеник) も書写させた。

〔ウラジーミルは〕祈禱書を購入して，長司祭たちに与えた。それを買うのに，8 クナ・グリヴナかかった。また，聖ゲオルギオス〔教会〕には 2 台の香炉を与えた。一つは銀製で，二つ目は銅製だった。また，挙栄用の十字架を聖ゲオルギオス〔教会〕に与え，金〔金泥･金箔〕で【*927*】聖ゲオルギオスの聖堂イコン[179] の画像を描かせた。そして，真珠で飾った金の首飾り (гривна) をそこに付した。

また，〔主教首座教会である〕聖母〔のイコン〕を金〔金泥・金箔〕で描かせ，そこに宝石を付けた金の首飾り (монисто) を付した。〔聖母教会の〕扉を鋳造した銅で葺いた。また，その〔教会堂の〕壁画を描き初め，三つの至聖所[180] をすべて描き終えた。丸屋根 (шия) の内側はすべて描いたが，〔描き〕終えなかった。病気が邪魔をしたのである。鐘を鋳造し，その聞き心地は，すべての土地にそのようなものはなかったほど，驚くべきものだった。

【ベレスチエの聖ペテロ教会の創建と奉納品について】

〔ウラジーミルは〕ベレスチエでは石造りの塔を創建した。その高さはほぼカメネツのものと同じくらいだった[181]。〔そこでは〕聖ペテロ教会を建てた。銀で表装したアプラコス福音書，銀で鋳造した奉事の器，銀の香炉を与え，挙栄用の十字架を置いた。

他にも，生前には多くの善行をなし，すべての地で有名だった。ここでわれらは，ウラジーミル [I1121] の公支配については終わりにしよう。

175）「三歌経」(триоди; триодь, триодион) は大斎準備期間から，五旬祭期の終わりまで，祈禱構成の中核を担う期間の典礼を扱う典礼書の総称。

176）「八調経」(охтаи; Ὀκτώηχος, октоих) は，典礼書 (богослужебные книги) のひとつで，祈禱歌唱の八調に基づき，時課で用いる第一調から第八調までの奉事の祈祷文が収録されている。

177）「連接歌集」(ермолои; ирмологион, ирмология) は，主にイルモス (ирмос) と呼ばれる短い祈祷文をまとめた祈禱書。

178）「奉事経」(служебникъ) は時課や聖体礼儀のために司祭が奉事の手順やテキストが記されている典礼書のこと。この場合は，聖ゲオルギオスに献げた祈祷文だけが収録されている書物を指している。

179）「聖堂イコン」(икона... намѣстная) とは聖堂が奉献された聖人，この場合は，聖ゲオルギオスの聖像画 (ｲｺﾝ) で，聖堂のイコノスタスの目立つところに掲げられる大きなイコンのこと。

180）中央の至聖所と両脇の副祭壇の至聖所をあわせて，三つと数えているのだろう。

181）この塔の高さが 17 サージェン（約 13m）だったことについては上注 162 を参照。

【ウラジーミル公の棺が塞がれる：1289 年 4 月 6 日】

ヴァシリコ [I112] の息子で，聖なる洗礼においてイオアン[182] (Иоаннъ)〔イヴァン〕と名付けられたこの篤信の公は棺に納められた。その遺体は〔棺の蓋が〕が塞がれないまま，12 月 11 日から 4 月 6 日まで棺に横たえられていた。かれの公妃は心を落ち着けることができず，主教エフセグニイ (Евсегений) およびすべての教会人とともにやって来て，棺〔の蓋〕を開くと，かれの遺体が白く全きかたちであるのを見た。棺からは芳香が立ち昇り，その香りは貴重な香料のようであった。このような奇蹟を見ると，見た者は神を讃美した。そして，4 月 6 日にかれの棺が塞がれた。受難週間の水曜日[183] のことだった。

【*928*】 ヴラジミルにおける大いなる公ムスチスラフ [S4] の公支配の始まり

6797〔1289〕年

【ムスチスラフ公はヴラジミルに行き，付属城市のベレスチエ，カメネツ，ベリスクがユーリイに占拠されていることを知る：1288 年末～ 1289 年初め】

ムスチスラフ公 [S4] は自分の兄弟ウラジーミル [I1121] の納棺式には間に合わなかったが，後になって，自分の貴族と家来たちとともに〔ヴラジミルに〕やって来た。そして，かれの兄弟ウラジーミルが安置されている主教座聖母教会へ行った。そして，かれの棺の上で大いなる悲哀の涙を流して泣いた。それは，自分の父である王〔ダニール [I111:S]〕を〔悼む〕ごときだった。

〔ムスチスラフは〕泣き止むと，〔ヴラジミルの〕城市のあらゆる場所に守備兵を派遣した。かれは，ベレスチエ (Берестье)，カメネツ (Каменьц)，ベリスク (Бѣльск) に〔守備兵を〕派遣しようとした。すると，かれのところに報告がもたらされた。すでにベレスチエ，カメネツ，ベリスクにユーリイ [S21] の守備隊がいるというのである。ベレスチエ人[184] は謀反を企て，まだウラジーミル公 [I1121] が病気のときに，かれらはユーリイ公 [S21] のもとに行って，十字架接吻で〔誓った上で〕こう言ったという。「あなたの叔父〔ムスチスラフ〕では物足りません。そうではなく，われらはあなたのもの，城市〔ベレスチエ〕はあなたのもの，あなたはわれらの公です」。

ウラジーミル [I1121] が逝去すると，ユーリイ [S21] は自分の叔父〔ムスチスラフ〕についての報告を聞いて，ベレスチエへ入城し，そこで公として支配を始めた。それは，無分別な自

182）ウラジーミル公の洗礼名については上注 122 を参照。

183）1289 年の復活大祭は 4 月 10 日であり，その前週の水曜日はたしかに 4 月 6 日に相当している。

184）ユーリイがウラジーミルの生前にベレスチエの領有を望んで，ウラジーミルに請願を行っていたことについては，上注 69 を参照。請願と同時に，ユーリイはベレスチエの有力者に内通する支持者 (приятели) を獲得する工作を行っていたのだろう。

分の若い貴族たちおよびベレスチエ人の謀反者たちの助言によるものだった。

【ムスチスラフはユーリイのベレスチエ占拠に対して，戦争を控えて，ユーリイとレフに使者を派遣する】

かれ〔ムスチスラフ〕の貴族と兄弟〔ウラジーミル [I1121]〕の貴族たちはムスチスラフ [S4] にこう言った。「主人よ，あなたの甥〔ユーリイ〕があなたに大いなる辱めを加えました。神とあなたの兄弟〔ウラジーミル〕は，あなたの祖父とあなたの父の祈り[185] を与えるでしょう。主人よ，われらはあなたのために命を投げ出すことを厭いません。われらの子供たち〔も同じです〕。先ずは出陣して，かれ〔ユーリイ〕の城市ベルズ (Белзъ) と【*929*】チェルヴェン (Червенъ) を占領しなさい。そして，ベレスチエ (Берестье) へも遠征されるがよい[186]。

ムスチスラフ [S4] 公は温厚[187]〔な人〕であり，自分の貴族たちにこう言った。「どうか神がわたしに, 罪なき者の血を流させるようなことがないように。わしは, 神と自分の兄弟ウラジーミル [I1121] の祝福によって，正しく振る舞うつもりだ」。

こうして〔ムスチスラフは〕自分の甥〔ユーリイ〕のもとに使者たち[188] を遣って, こう言った。「甥御よ，いったい，お前は，お前はあの遠征[189] にわしと〔一緒に〕いなかったとでも言うのか，そして〔その時〕お前は聞いていなかったとでも言うのか。いや，お前は自分ではっきりと聞いたはずだ。お前の父親〔レフ〕も〔聞いた〕。すべての軍勢が聞いたのだ。わしの

185）「あなたの祖父とあなたの父の祈り」(молитва дѣда твоего и отца твоего) の文言は，戦いにおける公に対する霊的な加勢として『原初年代記』『キエフ年代記』の中で頻繁に登場する。これは，具体的な祖父，父を指すと言うより「先祖代々」を意味する慣用句だろう。コマローヴィチによれば，この祈りはキリスト教の文脈で理解すべきではなく，大地信仰に源流を発する，公一族が保持してきた祖先崇拝に基づいているという [Комарович 1960: C. 90-92]。

186）西ブーグ川上流域の「ベルズ」と「チェルヴェン」が，かつてレフ [S2] がユーリイ [S21] に所領として与えた領地であることについては，上注 63, 64 を参照。ムスチスラフ [S4] の拠点城市ルチェスクから西へ 100km ほど遠征すれば到達できる距離のため，先にユーリイの本拠地を占領して，その後に遠方（ベレスチエ）の守備隊を攻める作戦を貴族たちは進言したのである。

187）年代記記者のムスチスラフ評価を示す興味深い語で,「温厚」の原文は легосердъ。中世ロシア語の辞典は незлобивый [СлРЯ XI-XVII Вып. 8: C. 192] や незлопамятный [Срезневский II: Стб. 64] などの語釈を付けており,「悪意のない」「淡泊な」くらいの意味合いだろう。後続の文脈から判断すると，そのような「温厚な」人物でさえも，流血の戦争を決意させるに至ったと，ユーリイの行動の非道さを強調するために書かれていることがわかる。

188）この「使者たち」の中に, 以下に言及される, ムスチスラフ配下の貴族パーヴェル・ディオニシエヴィチがいたと思われる（下注 200 参照）。

189）「あの遠征に」(на томъ пути) とは，1287 年 12 月にトゥラ・ブカ＝ハンの命令によって，ポーランドのサンドミェシュに向けた遠征にレフ [S2]，ユーリイ [S21]，ムスチスラフ [S4]，ウラジーミル [I1121] が動員されたときの遠征をさしている（[イパーチイ年代記 (13)：注 250, 280] 参照）。

兄弟ウラジーミル [I1121] が，自分のすべての地と諸城市を，その死後にわしに与えるということを。それは皇帝〔ハン〕のいる場, その側近たちのいる場でのことである [190]。〔そのことは〕そなたたちに〔ウラジーミルが〕告げたし, わしもまた〔そなたたちに〕告げた [191]。〔そのとき〕もし，そなたに何か望みがあったのなら，なぜ皇帝〔ハン〕のいる場で，わしと話をしなかったのか？　わしに告げよ，お前は自分の意志でベレスチエに自ら座したのか，それともお前の父の命令によって，わしにそのことを知らせるためなのか [192]？　血が流れるにしても，それはわしの〔血〕ではなく，罪あるものの〔血〕である。神と尊い十字架は，義しき者を助けるのである。わしは，タタール人に裁きを求める [193] つもりだ。おまえは,〔ベレスチエ〕に座しているがよい。もし，そなたが善意をもって〔謝罪に〕来るつもりがないのなら，さあ，悪意によって〔遠征に〕来るがよい」。

その後,〔ムスチスラフは〕自分の兄弟のレフ [S2] のもとに，自分のヴラジミル主教 [194] を派遣して, かれ〔使者〕に言った。「〔レフにこう〕言え。『わたしは神とあなたに苦情を訴えます』。またこう言え。『なぜなら，あなたは神によってわたしの年長の兄弟だからです。わが兄弟よ，告げ知らせて下さい。あなたの息子〔ユーリイ〕は自分の意志でベレスチエに座しているのですか？　それともあなたの命令によるものですか？　もし,〔ユーリイが〕あなたの命令でこれをなしたのであれば，わが兄弟よ，わたしはあなたに隠さずにこう告げましょう。わたしはタタール人に裁定を求める使者を派遣しました。自分自身も軍備を整えています。神がわたしに対して，あなたたちとのことを裁くでしょう。血が流れるにしてもそれはわたしの〔血〕ではなく，罪あるものの〔血〕でしょう [195]。僻事をなす者の〔血〕でしょう』」。

190）この，ウラジーミルの「遺言」とハンとその側近の臨席については，年代記の上記に [イパーチイ年代記 (13)：注 283 ～ 287]，ほとんど同じ文言があり，この個所はその反復（確認）である。

191）ウラジーミルとムスチスラフが「遺言」の内容をレフとユーリイに通知したことについては, [イパーチイ年代記 (13)：注 289] の部分で述べられている。

192）分かり難い表現だが,「そのこと」とは「ベレスチエがレフの所領であること」を指しているのだろう。レフはかねてからベレスチエの領有を主張しており，病床のウラジーミルのもとにペレムィシェリ主教メムノンを派遣して，死後にこの城市の譲渡を求めたことについては，上注 77 を参照。

193）「タタール人に裁きを求める」(правити татары) は, 次のレフ宛ての使者の言葉にある「タタール人に裁定を求める」(возводить татаръ) と同じ内容を指しており，実際には，トゥラ・ブカ＝ハンに請願して，ユーリイ [S21] 討伐の遠征軍を動員し，合同でユーリイを討つことを意味している。

194）ヴラジミル主教エフシグニイ (Евсигний) が，ウラジーミルの治世でも，重要な外交案件で使者の役割を果たしたことについては，[イパーチイ年代記 (13)：注 295] を参照。

195）「血が流れるにしても…」の文言は, 上のムスチスラフのユーリイ宛ての口上とまったく同じである。

【レフはムスチスラフがこの問題にタタール人を巻き込むことを恐れて，息子のユーリイにベレスチエからの撤退を命ずる】

レフ [S2] はこれを非常に恐れた。トゥラ･ブカの軍勢との厄介事[196]〔の始末〕がまだ済んでいなかったのである。そこで，〔レフは〕自分の兄弟〔ムスチスラフ〕の主教〔エフシグニイ〕にこう言った。「こう〔ムスチスラフに〕言え。『わしの息子は，わしが知らないうちにこれをなしたのであり, 神のみが知っていることである。〔息子は〕自身の若い〔未熟な〕知恵によってなしたのだ』。またこう言え。『わが兄弟よ，これについて嘆くことはない。わしはかれ〔息子〕に使者を遣って，わしの息子が城市〔ベレスチエ〕から出て行くよう取り計らおう』」。

主教〔エフシグニイ〕は，ムスチスラフ [S4] のところに戻って来た。そして，兄弟〔レフ〕の言葉を伝え始めた。ムスチスラフ [S4] はこれを気に入った。

その後，ムスチスラフ [S4] は速やかに，ポロシエ公ユーリイ[197] を呼び寄せる急使を派遣し，戻ってくるように命じた。〔かれを〕甥を討つタタール人の裁定を求めるために派遣していたからである。当時, ポロシエ公ユーリイは, ムスチスラフ [S4] に仕えていたが, その前はウラジーミル [I1121] に仕えていた。

そのとき〔ムスチスラフは次のことを〕聞いた。レフ [S2] 公が，自分の守り役の息子セミョン[198] (Семен) を, 自分の息子〔ユーリイ〕のもとに派遣して, 断固とした言葉でかれ〔ユーリイ〕

196）この「トゥラ・ブカの軍勢との厄介事」(оскомина Телебужины рати) とは，1288 年初めの冬に，トゥラ・ブカの遠征部隊がポーランドから撤退する帰路に，レフ [S2] の領地を掠奪・蹂躙して「1 万 2 千 5 百人」もの死者が出たこと，リヴォフも攻撃を受けたことを指している（[イパーチイ年代記 (13)：注 254, 299] 参照）。おそらく，レフの所領はこの被害からまだ回復しておらず，ムスチスラフ [S4] に軍事的に対抗する準備は出来ていなかったと思われる。なお，ポーランド語訳注は，トゥラ・ブカ軍の再来を恐れていたと解釈している [Kronika halicko-wołyńska 2017: s.269, przyp.1900]。

197）「ポロシエ公ユーリイ」(Юрьи князь пороский) とは，ロシ川 (река Рось) 流域の諸城市の支配公のことで，ウラジーミル [I1121] ＝ムスチスラフ [S4] はこの人物と同盟関係にあり，トゥラ・ブカ＝ハンの拠点地（ドナウ川下流域）に近いロシ川流域の支配公であったことから，重要な使者の役割を依頼したのだろう。このユーリイについてはここが初出で，かれが，リューリク王朝に属する公 (князь) か（ポーランド語訳注はこの立場），「ボロホフ諸公」（[イパーチイ年代記 (11)：注 57] 参照）と同様に土地の豪族（おそらくテュルク系部族）としての公 (князь) だった両方の可能性があり，定め難い。

198）「守り役の息子セミョンを」(Семена своего дядькович) の「守り役」が誰であるかについて，ロシア語訳注は，ヴァシリコの守り役 (дядька) で，のちに側近貴族として仕えたミロスラフ (Милослав) という人物（最後の言及は 1231 年 [イパーチイ年代記 (11)：注 25]）の息子の可能性を指摘しているが，ユーリイ配下の者であることや，ユーリイと年齢が離れ過ぎていることから，この説は可能性が低いだろう。ウクライナ語訳注は Дядькович を人名（父称）と解している。また，ポーランド語訳注は，1245 年のヤロスラフ城下の合戦のときに，ダニール [I111:S] が「レフ [S2] は子供だったので，ヴァシリコ (Василько) という勇敢で強壮な貴族の手にその身を委ねた」とする「ヴァシリコ」という貴族（[イパーチイ年代記 (11)：注 430]）が，この守り役ではなかったかと推定している [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 270, przyp. 1902]。

にこう言ったという。「城市〔ベレスチエ〕から出よ。その地を滅ぼすな。わしの兄弟〔ムスチスラフ〕はタタール人の裁定を求める使者を派遣した。もし〔城市を〕出なければ，わしは自分の兄弟〔ムスチスラフ[199]〕**【*931*】**を助けておまえを攻めるだろう。もしわしが死ぬようなことがあれば，自分の死後には自分の地はすべて自分の兄弟ムスチスラフ [S4] に与えるだろう。自分の父親であるわしに聴き従わないお前には，与えないだろう」。

セミョンがユーリイ [S21] のもとに向かっているとき，ムスチスラフ [S4] はかれ〔セミョン〕とともに，パーヴェル・ディオニシエヴィチ[200] (Павел Деонисьевич) を派遣し〔て同行させ〕た。この人物〔パーヴェル〕は先にレフ [S2] のもとに〔使者として〕行ったことがあり，すべての言葉〔事情〕を知っていたからである。〔ムスチスラフは〕かれ〔パーヴェル〕と一緒に自分の聴罪司祭も派遣して，パーヴェルにこう言った。「わしの甥〔ユーリイ〕が〔ベレスチエから〕出て行くようにせよ。わし〔が行く〕前に食料と飲料を準備せよ[201]。カメネツにおいて (в Каменци) も同様に準備せよ」。

【ユーリイは父の命令に従ってベレスチエから撤退してドロギチンへ向かう】

セミョンは，ユーリイ [S21] のもとに到着すると，父親〔レフ〕の言葉を伝えた。その翌日，ユーリイ [S21] は，大きな辱めとともに，城市〔ベレスチエ〕から出た[202]。〔ユーリイは〕自分の叔父の家屋をすべて掠奪し，ベレスチエにも，カメネツにも，ベリスクにも，一つの石も崩されずに他の石の上に残ることはなかった[203]。

パーヴェルはムスチスラフ [S4] にこう伝えた。「甥〔ユーリイ〕は出て行きました，主人よ，あなたは自分の城市にお向い下さい」。

199）この「ムスチスラフ」の名はイパーチイ写本にはないが，フレーブニコフ系写本では記されている。

200）「パーヴェル・ディオニシエヴィチ」(Павел Деонисьевич) の名はここが初出で他の個所に言及はない。ただし，先にムスチスラフがユーリイのもとに派遣した使節団の一人（おそらく代表）だったと思われる（上注 188 参照）。名と父称が使われていることからみて，ムスチスラフ配下の貴族であろう。1254/55 年冬に，ムスチスラフの父ダニール [I111:S] は，南ブグ川上流域のタタール支配地へ，ディオニシイ・パヴロヴィチ (Деонисий Павлович) という人物を派遣しているが，「パーヴェル」はその息子である可能性が高い（[Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 270, przyp. 1904] も参照）。

201）この「食料と飲料」(кормъ и питье) の語句は，年代記の慣用表現としては，公が民衆に施す食べ物と酒類として用いられることが多い。以下の事態の記述から見てここでは，ユーリイとその手勢の掠奪によって荒廃したベレスチエとカメネツの住民のための施しという意味合いがあるだろう。ムスチスラフが良き統治者であることを示すために加えられたエピソードである。

202）すぐ後の記述でわかるように，ユーリイ [S21] は，ベレスチエ（ブレスト）から，80km ほど西ブーグ川を下ったところのドロギチンに移ったのである。

203）「一つの石も崩されずに他の石の上に残ることはなかった」(и не остася камень на камени) の文言は，新約『マタイによる福音書』24:2 の表現を借用したもの。

【ムスチスラフはベレスチエへ行き，住民に迎えられる】

ムスチスラフ [S4] は，ベレスチエへ向けて出発した。城市〔ベレスチエ〕に近づくと，住民たちが貴賤を問わず，十字架を手にして迎えに出た。そして，大いなる喜びとともに自分たちの主人〔ムスチスラフ〕を受け入れた。

ベレスチエ人の謀反の指導者たちは，ユーリイ [S21] のあとを追ってドロギチン[204] (Дорогичин) まで逃げた。〔ユーリイは〕かれらに対して，こう十字架接吻〔で誓った〕からである。「わしはお前たちを自分の叔父〔ムスチスラフ〕に引き渡すことはしない」。

ムスチスラフ [S4] はベレスチエに，わずかな日数滞在しただけだった。そして，カメネツとベリスクまで行った。すべての人々はかれ〔の到来〕を喜んだ。〔ムスチスラフは〕人々の支持を固めると，ベリスクとカメネツに守備隊を置いた。

【ムスチスラフはベレスチエの住民に狩猟税を課して，ヴラジミルへ戻る：1289 年 5 月～ 6 月】

〔ムスチスラフは〕ベレスチエに戻って来て，自分の貴族たちにこう言った。「ここには狩猟税[205] があるか」。かれらは言った。「ありません, 主人よ, これまで一度も」。ムスチスラフ [S4] は言った。「わしはそれゆえに，かれら〔ベレスチエ人〕に，かれらの謀反に対して狩猟税を課すことにしよう。わしがかれらの上に血を見る[206] ことのないようにするために」。そして，自分の書記に命じて〔次の〕文書を書かせた。

「わたし, ムスチスラフ公 [S4], 王〔ダニール [I111:S]〕の息子にして, ロマン [I11] の孫は,

204）「ドロギチン」がレフ [S2] 一族の統治下にあったことについては，上注 66 および [イパーチイ年代記 (13)：注 76] を参照。

205）「狩猟税」(ловчее) の語は，この個所が中世文献で唯一の用例だが，文脈から見て，公やその配下の者が狩猟をするとき, 狩場になる村が負担すべき扶養 (ловчий корм) 義務を指していると推定される。ベレスチエの住民の「謀反に対して」課されていることから，一種の懲罰的な課税だったと考えられる。実際，以下に列挙されている食料，飲料，飼料の品目と数量を見ると，担税 100 戸（注 207）あたりの負担としてはかなり重いものである。

なお，ベレスチエが狩猟の場として有名だったことについては，1280 年のポーランド人によるクロスナ川流域の掠奪とベレスチエ人による反撃のエピソードの中で, ベレスチエ人軍司令官ティートは「戦争でも狩猟でも」雄壮さで有名だったという言説（[イパーチイ年代記 (13)：注 221]）からも見て取ることができる。

206）「～の上の血」(кровь на ком-либо) は，相手を斬り殺す制裁を意味する定型表現。『原初年代記』1103 年の項でモノマフ公が人質にとったポロヴェツ人首長を処罰したときにも「お前の頭に血があれ」буди кровь твоя на главѣ твоей と宣言している [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 279]。

かれらの謀反ゆえに，ベレスチエ人に狩猟税を末永く課す。それぞれの百人区[207]から，蜜酒 2 ルクノずつ[208]，雌羊 2 頭ずつ，10 枚束の亜麻布を 50 束ずつ[209]，パンを 100 個ずつ，燕麦 5 ツェベル[210]とライ麦 5 ツェベルずつ，ニワトリ 20 羽ずつを〔徴収する〕。これだけをすべての百人区からそれぞれ〔徴収する〕。他方，住民には 4 クナ・グリヴナ[211]を〔課す〕。わたしの言葉〔命令〕に違反した者は，わしとともに神の前に立つだろう。わたしは，かれらの謀反について年代記に書き記した[212]」[213]。

〔ムスチスラフは〕ベレスチエに守備隊を置くと，ヴラジミルへ向けて出発した。かれがヴラジミルに到着すると，長老および年少のかれの貴族たちがかれのところに集まってきた。数

207）「百人区」(сто) は徴税のために設定した居住単位を示すが，13 世紀ノヴゴロドでは居住区として Давыжа ста のように名前が付いていた [Горский 2019: С. 326]。ただしここでは「100 戸（担税戸の数）に対して」くらいの意味だろう。

208）この「ルクノ」(лукно) の原義は「曲げ物」で，そこから液体を入れる「桶」を指すが，ここでは液・粒・粉状の物の容量単位を意味し，『ルーシ法典（簡本）』の時代（11 世紀）には，1 ルクノ（桶）は 60 フントすなわち 24-25kg 相当という説がある。しかし，それよりはるかに大きいという異説もある [Романова 2017: С: 156-157]。

209）「10 枚束の亜麻布 50 束」(по мятидцать десяткъвъ лну) の「亜麻布」(лен) は，当時の庶民にとっては衣料の唯一の素材であり，各村では栽培から機織りまでを自分たちの手で行っていた。この記事によれば，織られた生地 10 枚一束が流通の単位だったと考えられる。

なお，フレーブニコフ系写本では по пятьнадесять と表記されており，10 枚一束の亜麻布 15 束という解釈も可能である。

210）「ツェベル」(цебер) は液・粒・粉状の物の容量単位で，ポーランド語からの借用語だが，用例が少ないことから，実際の容量については不明 [Романова 2017: С: 406]。コトリャールは 1 ツェルベルを約 10 リットル容量の桶と推定しており，その場合それぞれ 50 リットルの穀物ということになる [Котляр 2005: С. 365]。

211）この「4 クナ・グリヴナ」(4 гривна кун) は，一人ずつからではなくベレスチエの住民全体でこの金額と徴収ということだろう。『法制史資料集』の注では，住民 (горажини) を城市内に屋敷 (усадьба) を持つ者，すなわち上級市民と理解して，かれら一人当たりと解釈している（[Российское законодательство Т. 1: С. 211] 注参照）。

「クナ・グリヴナ」の金銭単位については，11 世紀の 1 クナ・グリヴナの対銀比価値は，50 ～ 68g だから，4 クナ・グリヴナは 200g 以上の銀相当（いわゆる銀グリヴナ）と解釈でき，これはノヴゴロドで発掘されている銀塊一本に相当するかなり大きな負担である。なお，12 ～ 13 世紀以降に価値低下を起こした時期の価値 (従来の 1/7.5) と考えると，4 クナ・グリヴナは，およそ銀 27.2g 相当になる [Назарерко 1996: С. 74-77]。こちらのほうが妥当な負担か。

212）この「年代記に書き記す」(вопсал... в лѣтопиѣць) という表現は，文書中の「末永く」(в вѣки) 課税されることの記録という意味合いを持つのだろうが，本年代記が書き継がれることが想定されていて興味深い。実際には，ムスチスラフ [S4] が主導して書き継いだ「年代記」は残念ながら現存していない。

213）この狩猟税に関する「文書」の本文は，フレーブニコフ写本では，上注 158 の個所の後に置かれている。

え切れないほど多かった[214]。

【ムスチスラフ公のヴラジミル公座就位とこれについての讃詞：1289 年 4 月 10 日】

ムスチスラフ公 [S4] は，自分の兄弟ウラジーミル [I1121] の公座に座した。それは，まさに〔復活〕大祭の日 4 月 10 日のことだった。〔ムスチスラフは〕自分の兄弟を継いで公支配を初め，真実への愛**【*933*】**によってすべての自分の兄弟たち，貴族たち，庶民たちにとって光輝いていた。その時，人々には大いなる喜びがあった。見よ，主の復活であり，公座への就位である。〔ムスチスラフは〕周辺の国々との，ポーランド人との，ドイツ人との，リトアニア人との平和を守り，その偉容によって自らの地を支配し，それはタタール人〔の地〕にまでおよび，こちらはポーランド人，リトアニア人〔の地〕までおよんだ。

【リトアニア公はムスチスラフにヴォルコヴィエスクを与える：1289 年夏頃】

その時，リトアニア公ブティゲイディス (Будикидъ) とかれの兄弟ブトヴィダス (Будиидъ)[215] は，ムスチスラフ公 [S4] に自分の城市ヴォルコヴィエスク[216](Волъковыескь) を与えた。それは，〔ムスチスラフが〕かれらと平和を守るためであった。

【マゾフシェ公コンラート二世はムスチスラフの支援を得てサンドミェシュを手に入れる：1289 年夏】

そのとき，シェモヴィトの子コンラート〔二世〕がムスチスラフ [S4] のもとに来ていた。

かれは，サンドミェシュ公国への遠征を狙っており，ポーランド人を攻めるための援軍を要請したのである。ムスチスラフ [S4] は〔援軍を〕かれに約束した。〔ムスチスラフは〕コンラートとかれの貴族たちにあらゆる贈物を与え，〔かれらが〕帰郷する〔別れ際に〕，かれ〔コンラート〕に言った。「そなたは行くがよい。わしも，そなたの後から自分の軍隊を派遣しよう」。コ

214）この段落の文言は，イパーチイ写本では，次のリトアニア公に関する記事の「…かれらと平和を守るためであった」の後に置かれているが，記事の文脈と時系列から見て，フレーブニコフ写本の順番が正しいと考えられるので，こちらに移した。

215）リトアニアの支配公ブティゲイディス (Будикидъ) とその兄弟ブトヴィダス (Будивидъ) については，リトアニアの支配権がミンダウガス朝（13 世紀後半）からゲデミナス朝（14 世紀初頭）へと移行する過渡期のリトアニアの支配公一族に属し，その出自等については不明なところが多い。

216）「ヴォルコヴィエスク」(Волковыескъ) は，現在のベラルーシ，グロドノ州の州都ヴァウカヴィスク (Ваўкавыск) に相当し，ベレスチエから北北東へ 129km の地点にある。1278 年頃はリトアニア公トライデニスの支配下にあったと思われ（[イパーチイ年代記 (13)：注 119] 参照），歴代のリトアニア公に支配が受け継がれてきたのだろう。リトアニアにとっては南の，ヴォルィニ地方との境界地帯に位置しており，この城市のムスチスラフ [S4] への引き渡しは，何らかの同盟のためか，単に戦争に負けただけのことなのか，その理由は不明である。

ンラートが出発すると，ムスチスラフ [S4] は自分の軍隊を集めて，これを派遣し，チューディン[217] (Чюдин) を軍司令官に任命した。このようにして, コンラート公は, 王〔ダニール [I111:S]〕の息子であるムスチスラフ [S4] 公の手により，かれの支援によって，サンドミェシュに公として座した。**【*934*】**

6798〔1290〕年

【レシェク黒公死後のポーランドにおけるクラクフ大公位をめぐる政争】

レシェク (Лѣстька) の死後[218]，クラクフではコンラートの兄弟で，シェモヴィトの子ボレスワフ (Болеслав Сомовитоичь)〔二世〕が〔公座に〕座した[219]。ヴロツワフ公ヘンリク[220] (Индрихъ князь Воротьславьский)〔四世〕が〔クラクフに〕到来して, かれ〔ボレスワフ〕を追放した。自分が公として支配することを望んだのである。

ボレスワフは，自分の軍隊と自分の兄弟コンラートと〔ヴワディスワフ〕短身公[221] (Локотък) を集めて，ヘンリク (Андрихъ) を攻めるべくクラクフへと進軍を始めた。ヘンリクはかれらの到来に耐え切れずに，〔クラクフを〕出てヴロツワフ (до Воротьславля) へと向

217）この軍司令官「チューディン」(Чюдин) についてはここが初出で詳細は不明。

218）1288 年 9 月 30 日にポーランド大公（クラクフ＝サンドミェシュ公）レシェク二世黒公は後継者がないまま没した（上注 47 参照）。

219）ポーランド諸公の政争について，ここでは単純化して述べられているが，事態はかなり複雑に進展している。クラクフ公レシェク黒公の死後，ヘンリク四世は，ローマ王ルドルフ一世およびシロンスク地方の諸公と連合して後継の大公位を狙い, そのために 1289 年 2 月 26 日, ボレスワフ二世（マゾフシェのプウォツク公）とヴワディスワフ短身公の連合軍と，シェヴィエシュで合戦を行ったが，ヘンリク軍が敗れた。ところが，勝ったボレスワフは，同盟者のヴワディスワフにクラクフ大公位を譲り，ヴワディスワフはクラクフを包囲，占領した [IPSB: HENRYK IV PROBUS (PRAWY)]。

220）ヴロツワフ (Wrocław) 公のヘンリク (Henryk) 四世は,「高潔公」(Probus, Prawy) の通称で呼ばれるヴロツワフ公（在位 1266 - 1290 年）で，1288 年～ 1290 年はクラクフおよびポーランド大公。かれについては, 6781(1273) 年の記事に単に「ヴロツワフ公」(воротьславьский князь) として言及がある（[イパーチイ年代記 (13)：注 65]）。

221）「短身公」(Локотък) は，ヴワディスワフ一世短身公（Władysław I Łokietek, 1260 - 1333 年）のこと。当時はクヤヴィ公だった。従兄弟にあたる，プウォツク公ボレスワフ〔二世〕と同盟して，クラクフ大公位を要求した。ロキエテク (Łokietek) は通称で，本年代記ではあまり重視されていないようである。かれはヘンリク四世の死後 (1290 年)，1305 年からはクラクフ大公に就き，1320 年には国王として戴冠している [IPB:Władysław I Łokietek]。

本年代記では，かれについてはカジミェシュ一世の息子「ヴワディスワフ」(Володиславъ) として，1280 年の記事に言及がある [イパーチイ年代記 (13)：注 154]。

かった[222]。かれ〔ヘンリク〕は守備隊をクラクフに置いた。すなわち〔それは〕，ドイツ人と自分の最良の家臣たちだった。〔ヘンリクは〕かれらに沢山の下賜品と領地を約束し，かれら自身を十字架に導いて，ボレスワフに城を引き渡さないとの〔誓約を〕させた。かれらは〔十字架に〕接吻すると，こう言った。「われらは自分の命を投げ出す覚悟です。城を引き渡すことはしません」。ヘンリクはかれらに充分な食糧を残した。

ボレスワフは自分の兄弟たちと〔クラクフに〕やって来ると，城下〔下町〕に入った。しかし，〔ヴァヴェル〕城内には軍勢が入ることはできなかった[223]。なぜなら，〔守備隊が〕城内から投石機や弩弓で激しく戦ったからである。そのため，そこ〔城内〕へ突撃することは出来なかった。城の周りに布陣し，〔周辺の〕村を〔掠奪して〕食料を確保した。ある時，食料徴発のために城市から遠いところまで行った。城市民は住民とともにボレスワフを恐れてはいなかった。かれらは言った。「クラクフに公支配のために座した者が，われらの公である」。**【*935*】**

【ボレスワフ公の連合軍はクラクフを長期間包囲する：1289 年夏】

こうして城を囲んでひと夏あまりも布陣し，城を攻めた。しかし，なんの成果も上げることができなかった。

6799〔1291〕年

【レフ公はボレスワフの援軍としてクラクフへ遠征する：1289 年 6 月】

ムスチスラフ [S4] の兄弟で王〔ダニール [I111:S]〕の息子，ロマン [I11] の孫であるレフ公 [S2] は，ボレスワフ (Болеслав)〔二世〕を助けるべく自ら遠征をした。かれはクラクフへやって来ると，ボレスワフ，コンラート (Кондратъ)〔二世〕，短身王 (Локотко)〔ヴワディスワフ四世〕はかれ〔の到来〕を，まるで自分たちの父親のように喜んだ。なぜなら，レフ [S2] は戦争において思慮深く，勇敢で，頑強だったからである。〔レフは〕多くの戦争において，自らの雄々しさを少なからず見せていたからである。

222）1289 年 8 月にヘンリク四世は再度軍勢を集めて，クラクフに進軍し，都市民の寝返りと，フランシスコ修道会の支援によって，最終的にはクラクフの大公位を手に入れた。しかし，ヘンリク 4 世はクラクフ入りせずに拠点地であるサンドミェシュに留まった（本記事ではヴロツワフになっている）。本記事の，ボレスワフ連合軍とクラクフの都市民との内城（ヴァヴェル城）をめぐる戦いは，この夏のことを述べている [IPSB: HENRYK IV PROBUS (PRAWY)]。

223）本文はクラクフの城下 (мѣст) と内城 (город) をはっきりと分けており，ボレスワフ軍が入城したのは，城下（現在の旧市街に相当する）の方で，戦闘を行ったのは，現在のクラクフの内城，現在のヴァヴェル城（Zamek na Wawelu）を攻略するためである。

レフ [S2] は，城の周りを馬で駆け始めた。かれはどこかから〔城を〕攻略しようとし，城市民に脅威を与えようとしたのである。しかし，どこからも〔攻略することは〕できなかった。すべて〔城〕は石で造られていたからであり，その堅固さは大したもので，巻き上げ機付き[224]の大小の投石機や弩弓〔があった〕。それから〔レフは〕自分の陣営へ戻った。

【レフ公はトゥイネツの城砦もクラクフの城も攻め落とせず：1289 年 6 月～ 7 月】

翌朝，〔レフは〕日の出ころに起きると，トゥイネツ[225] (Тыньць) へと出発した。そこで，激しく戦ったが，城砦を攻略できなかった。多くの城市民が，かれらの手で撃ち殺されたり，負傷したりしたが，自分たち〔レフの軍兵〕は全員無事だった。

レフ [S2] は，再びクラクフへやって来た。そして，自分の軍兵たちに軍備を整えるよう命じた，城に向かって行き，戦おうと望んだのである。**【*936*】**〔レフは〕ポーランド人に対してもそうするように命じた。そして，全員が進軍して，胸壁まではい上って行った。両軍は激しく戦った。

その時，レフ公 [S2] に報告がもたらされた。大軍がかれを攻めるために進軍しているというのである。〔レフは〕戦闘を止めるよう命じた。そして，自分の部隊を整列させ，ボレスワフとコンラートも自分の〔部隊を整列させた〕。そして，軍隊を偵察させるために斥候を派遣した。何も起こっていなかった。しかし〔このことは〕，〔城防衛の〕ポーランド人軍司令官たちが，城を攻略されないために，自分たちでかれ〔レフ〕を脅かしたのだった[226]。

【レフはヴロツワフ方面へ軍を派遣して掠奪を行う：1289 年 6 月 30 日～ 7 月】

レフ [S2] は，かれらの〔この〕策略を見抜くと，自分の貴族たちと充分に評議を行い，ヘンリクの地 (Индрихьвы земли) を掠奪するために，ヴロツワフ (Воротьслав) へ向けて自分の軍隊を派遣した[227]。そして，数えきれぬほど多数の奴隷，家畜，馬，輜重を獲った。なぜなら，これまでいかなる軍隊もこれほど深くかれの地へ入り込んだことはなかったからである。そして，〔派遣軍は〕レフ [S2] のもとに，大いなる名誉と多数の捕虜とともに戻って来た。レフ [S2] は，自分の〔軍兵〕全員が無事で健勝であり，捕虜が多いことを大変喜んだ。

224）「巻き上げ機付き」(коловортныи) の巻き上げ機 (коловорот) は，投石機 (порокы) や弩弓 (самострѣлы) の強力な弦を引き絞るための巻き上げ式の器械のこと。

225）「トゥイネツ」(Тыньць) は，クラクフ中心地から南西方向へ 11km ほどヴィスワ川を遡った，河岸右岸に位置するティニエツ城砦 (Tyniec) のこと。11 世紀中頃からベネディクト会の修道院が創設され，修道会の拠点となった。当時は，ヘンリク四世の部隊が立て籠もっていたと考えられる。

226）フレーブニコフ写本のこの個所の書き込み（欄外古註）には「ポーランド人自らがニュース (новины) を考え出した」と書かれている。

227）ポーランド史料によると，1289 年 6 月 30 日にレフの軍隊がグロトコフとニシの周辺を蹂躙している。[Літопис руський, 1989: С. 452]

【レフ公自身はチェコ王と会合をしたのちに，戦利品を手に帰国する：1289 年 8 月】

その時，レフ [S2] はチェコ人のもとへ，王のもと[228]へ会合のために出かけた。なぜなら，かれ〔チェコ王〕と大いなる信愛を結んでいたからである。そして，〔レフは〕自分が生きている間はかれ〔王〕と平和を保つ協定を結んだ。王はレフ [S2] に対して，あらゆる高価な贈物を与えて，こうして大いなる名誉とともにかれ〔レフ〕を帰らせ，〔レフは〕自分の部隊のところに戻って来た。**【*937*】**

かれの貴族たちと配下の従者たちは，自分の主人を見て，かれ〔の帰還を〕喜んだ。クラクフの城〔の攻略〕はいかにしてもうまく行かなかった。そして，レフ [S2] は，数え切れないほど多数の捕虜，奴隷，家畜，馬，輜重を獲得して，大いなる名誉とともに帰国の途についた。かれは神と自分を助けてくれた至浄なるその母を讃えた。

【ムスチスラフはヴラジミルにロマン公妃の墓廟を建てる：1289 年】

同じ年，ムスチスラフ公 [S4] に対して，神はかれの心に善き考えをもたらした。〔ムスチスラフは〕聖人[229]の修道院にあるロマン [I1] の妃[230] (Романова) で自分の祖母の棺の上に，石造りの墓廟を建てた。そして，それ〔墓廟〕を義人ヨアキムとアンナ〔の名〕に献堂し[231]**【*938*】**，そこで奉事を行った。

228）このチェコ人 (чехы) の王 (король) とは，プシェミスル朝出身のボヘミア王ヴァーツラフ二世（在位 1278 - 1305 年）を指している。この後，1290 年にヴロツワフ公ヘンリク四世が亡くなると，その遺言によって，ヴィエルコポルスカ公プシェミスウ二世がクラクフ大公位とサンドミェシュを獲得するが，ヴァーツラフ二世はまもなくプシェミスウを追放し，1295 年にはポーランド王に即位している。ユーリイは，王の拠点都市「オパヴァ」（Опава, Opava）において，ヴァーツラフと同盟を結び，ともにヴワディスワフ短身公のクラクフ大公位を支持することを確認した。同時に，ユーリイはこのとき，息子ユーリイ [S21] とカジミェシュ一世の娘エフィミア（ヴワディスワフ短身公の姉妹にあたる）との結婚について，ヴワディスワフと取り決めたと考えられる [Войтович 2013: C. 184-185]。

229）「聖人」(въ святого)。本来なら誰（どのような名の聖人）に献堂された修道院かその名が入るはずだが，どの写本も聖人の名が抜けている。これが城市ヴラジミルの修道院であると推定して，ウクライナ語訳注は，聖大ヴァシーリイ修道院のこととしている（下注 231 参照）。

230）このロマン公 [I11] の妃で，ダニール公 [I111:S] の母にあたる女性は，公妃 (княгини) として本年代記では頻繁に言及されている。かの女の死についての記事はないが，1219 年頃に受戒して修道女になっており（[イパーチイ年代記 (10)：注 263]），まもなくヴラジミルで死亡して，埋葬されたと考えられるだろう。

231）このヨアキムとアンナの墓廟（礼拝堂）(гробница) は，現在のヴラジミル＝ヴォルィンスキイの中央にある聖ヴァシーリイ教会（ヴァシーリイ円形建築 (Василівська ротонда)）（上注 229）に比定することができる。

【ムスチスラフはチェルトルィスクに〈塔〉を定礎する：1289 年秋】

同じ年,〔ムスチスラフは〕チェルトルィスク [232] (Черторыйскы) の城市で石造りの塔 [233] を定礎した [234]。

6800〔1292〕年

【ピンスク公ユーリイの死：1289/90 年冬】

その年の冬 [235], ウラジーミル [B321311] の息子であるピンスク公ユーリイ [236][B3213112] が逝去した。温順で謙抑で義の人だった。かれを悼んで，かれの公妃，かれの息子たち，かれの兄弟デミド [237] (Демидъ) [B3213113] 公は泣いた。すべての家来たちはかれを悼んで大いに号泣した。

【ステパン公イヴァンの死：1289/90 年冬】

その年の冬, グレーブの息子でステパン [238] 公イヴァン [239] が逝去した。すべての家来たちが貴賤を問わず，かれを悼んで泣いた。かれの代わりに，その息子ウラジーミルが公として支配を始めた。

232）「チェルトルィスク」(Черторыйскы) は，プリピャチ川支流のストィリ川 (Стырь) の中流域の河岸にある城市。現在のヴォルィニ州スタルィ・チョルトリイスク村 (Старий Чорторийськ) に相当する。ムスチスラフの拠点都市ルチェスク（ルーツク）からストィリ川を 65km ほど遡ったところにある（[イパーチイ年代記 (10)：注 442] 参照）。

233）「石造りの塔」(столпъ камен) については, 本年代記のグロドノの城市の描写に同じ表現があり（[イパーチイ年代記 (13): 注 125]），これと同様の城門防衛用の建築物だったのではないか（[Моргунов 2009: C. 147-149] 参照）。

234）フレーブニコフ写本は，この記事で年代記が終わっており，以下の記事はイパーチイ写本とポゴージン写本（フレーブニコフ系）に拠っている。

235）「その年の冬」はポゴージン写本のみの読み。1289/90 年冬と推定できる。

236）ピンスク公ユーリイについては，1262 年の記事に言及がある。[イパーチイ年代記 (12)：注 383] を参照。

237）ユーリイ（前注）の兄弟のデミドについても [イパーチイ年代記 (12)：注 382] を参照。

238）「ステパン」(原文は Степаньский) は, 現在のホルィニ川 (Горынь) 中流域に位置するリヴノ郡の都市ステパニ (Степань) に相当する，ムスチスラフの拠点都市ルチェスク（ルーツク）から北東へ 78km ほど離れている。

239）本年代記でステパン（前注）の公座についてはここが最初の言及であり，その支配公についてもこれまで記述はない。そのため，このイヴァン・グレーボヴィチ公とその息子ウラジーミルの系図上の位置づけも不明である。

参考文献

Антипов 2000 — Антипов, И.В. Древнерусская архитектура второй половины XIII- первой трети XIV в. Каталог памятников. СПб., 2000.

Войтович 2013 — Войтович, Леонтій. Лев Данилович: «князь думен и хоробор на рати» чи «безчесний князь»? // Україна в Центрально-Східній Європі. Вип. 12-13. 2013.

Горский 2019 — Горский А. А. Русское средневековое общество: Историко-терминологический справочник. СПб., 2019

Древняя Русь 2015 —— Древняя Русь в средневековом мире. М., 2015.

Карпов 2017 —— Карпов А. Ю. Русская церковь X – XIII вв. Биографический словарь. М., 2017.

Колесов 1986 — Колесов В. В. Мир человека в слове Древней Руси. Л., 1986.

Купчинський 2004 — Купчинський О. Акти та документи Галицько-Волинського князівства XIII – першої половини XIV століть: Дослідження. Тексти. Львів, 2004.

Комарович 1960 — Комарович В. Л. Культ рода и земли в княжеской среде XI-XIII вв. // Труды Отдела древнерусской литературы / Академия наук СССР. Институт русской литературы (Пушкинский Дом); Отв. ред. Д. С. Лихачев. — М.; Л. 1960. Т. 16. С. 85-104.

Лукин 2010 — Лукин П. В. «Мѣстичи роусции» во Владимире Волынском // История: Дар и долг. Юбилейный сборник в честь Александра Васильевича Назаренко. М.: СПб., 2010. С. 159 - 176.

Моргунов 2009 — Моргунов Ю.Ю. Древо-земляные укрепления Южной Руси X-XIII веков. М., 2009.

Нерознак 1983 — Нерознак В. П. Названия Древнерусских городов. М., 1983.

Накадзава 2003 —Накадзава А. Рукописание Магнуша: Исследование и тексты. СПб.: Дмитрий Буланин, 2003.

Насонов 1969 — Насонов А. Н. История русского летописания XI – начала XVIII века: Очерки и исследования. М., 1969.

Романова 2017 — Романова Г. Я. Объяснительный словарь старинных русских мер. М., 2017.

Российское законодательство Т. 1 — Российское законодательство X-XX веков в 9 т., Т. 1 : Законодательство Древней Руси. М., 1984.

СДЯ — Словарь древнерусского языка (XI—XIV вв.). М., 1988-201. Т. 1-12.

СлРЯ XI-XVII — Словарь русского языка XI-XVII вв. Т. 1 - 30.

Теодорович 1893 — Теодорович Н.И. Город Владимир Волынской губернии в связи с историей Волынской иерархии. 1893

Терський 2006 — Терський С. В. Лучеськ X–XV ст. Львів, 2006.

Терський 2010 — Терський С. В. Княже місто Володимир. Львів, 2010.

Толочко 2005 — Толочко А.П. Происхождение хронологии ипатьевского списка Галицко-волынской летописи // Palaeoslavica. Cambridge (mass.), 2005. vol. 13, no. 1. P. 90–108.

Энциклопедия СПИ Т. 1-5 — Энциклопедия «Слова о полку Игореве»: В 5 томах. СПб.: Дмитрий Буланин. 1995. Т. 1. А—В. 1995; Т. 2. Г—И. 1995; Т. 3. К—О.1995; Т. 4. П—Слово. 1995; Т. 5. Слово Даниила Заточника—Я. Дополнения. Карты. Указатели. 1995.

IPSB — IPSB (INTERNETOWY POLSKI SŁOWNIK BIOGRAFICZNY) http://ipsb.nina.gov.pl/Home

KHW(KR) — Kronika halicko-wołyńska (Kronika Romanowiczów), wydali, wstępem i przypisami opatrzyli Dariusz Dąbrowski, Adrian Jusupović przy współpracy Iriny Juriejew, Aleksandra Majorowa i Tatiany Wiłkuł [w:] Pomniki Dziejowe Polski, Seria II - Tom XVI. Kraków-Warszawa, 2017.

Kronika halicko-wołyńska 2017 — Dariusz Dąbrowski, Adrian Jusupović Kronika halicko-wołyńska.

Kroniką Romanowiczów. Avalon Kraków-Warszawa, 2017.
Perfecky 1973 — Perfecky, George A. The Galician-Volynian Chronicle. Munich: Wilhelm Fink Verlag, 1973.
Włodarski 1966 — Bronisław Włodarski, Polska i Ruś 1194-1340, Warsaw: PWN, 1966.

イパーチイ年代記 (10) — 中沢敦夫, 今村栄一『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (10) ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1201 ～ 1229 年）『富山大学人文学部紀要』（70 号，2019 年 2 月）。
イパーチイ年代記 (11) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (11) ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1230 ～ 1250 年）『富山大学人文学部紀要』（71 号，2019 年 8 月）。
イパーチイ年代記 (12) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (12) ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1251 ～ 1264 年）『富山大学人文学部紀要』（72 号，2020 年 2 月）。
イパーチイ年代記 (13) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (13) ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1265 ～ 1287 年）『富山大学人文学部紀要』（73 号，2020 年 8 月）。
三浦 2012 — 三浦清美「中世ロシア文学図書館（III）中世ロシアの説教①／非業に斃れた公たち」『電気通信大学紀要 24 巻 1 号』，2012 年。

〔後記〕

本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果である。共同執筆者の宮野裕は岐阜聖徳学園大学教育学部准教授であり，今村栄一は名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパスのプロジェクト調整員である。

本稿は，2020 年度 JSPS 科研費，基盤研究 (C)「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」（19K00469，研究代表者：中澤敦夫）の助成を受けて行われた研究に基づいている。